

今日の田舎電鉄

ageha-love

今日の田舎電鉄始まり

田舎電鉄の一日

今日も列車が来ない田舎電鉄の田舎駅のにゃん駅長と唯一の駅員である、りおんちゃんは駅の事務室で朝から話しあいをしておりました。

にゃん駅長（以後「に」）：「さあてと、今日は何しようか？」

りおん駅員ちゃん（以後「り」）：「何しましょうか？」

に：「私は近所の散歩と昼寝とやることがいっぱいあるから。」

り：「え〜〜？ 今日も昼寝ですか〜〜？」

に：「今日も！でもいいだろ？ 別に。」

り：「いいですけど〜〜 私は何すればいいんですか？」

に：「ホームの掃除は？」

り：「昨日で上りも下りも終わりました〜」

に：「ほとんど列車のこないうちの駅に上りとか下りってあったのか？」

り：「そういえば・・・どっちが上り？でどっちが下り？でしたっけ？」

に：「どっちかにゃあ？」

り：「そんな時だけネコ言葉使っても・・・決めないとダメでしょう？」

に：「ほとんど列車のこないホームに必要なのか？」

り：「ほとんどって事でたまにはくるんだからあ、決めとかなないとダメなんじゃないですか？」

り：「乗ろうとした人が迷っちゃうでしょ？」

に：「そうだな〜〜 でも、私達で決めていいのか？」

り：「じゃあ、本社に聴いてみてくださいよ〜」

に：「やれやれ、、、仕事しなきゃいかんのか・・・ 昼寝が・・・」

り：「じゃ、私は駅舎の掃除してますね〜〜〜」

に：「昨日もしてなかったか？」

り：「だあってえ、列車も来ない、乗降客もない駅舎なのに無駄に大きいんですもの。」

に：「そうだよな〜〜 この大きさは何のために？」

り：「ですよ〜？ 私がくるまでは駅長さんの独り住まい？一匹住まい？だったんでしょ？」

に：「んなこた一一一知らんにゃん。」

り：「ちゃんと聴いといてくださいね〜 掃除してきま〜〜〜す。」

に：「今日のお昼はメザシがいいにゃ〜〜〜」

今日もタワイモ無い会話で始まり・・・そのまま終わる田舎駅・・・

今日も今日とて列車がくるんだかこないんだか判らない日の幕開けである。

一人と一匹は朝ご飯を食べていた。

にゃん駅長はメザシを載せたご飯に暖かいみそ汁をかけてもらった、通称ネコまんま。 駅長たるもの某モ〇プチとかを食べていそうだがいたって質素な食生活を送っている。。。

りおんちゃんはこの頃の女の子には珍しく朝はご飯とみそ汁、お漬物があれば十分と言う生活である。

り：「駅長さん。 今日は何しましょうか？」

に：「そう毎日毎日聞かなくてもいいだろう？ 好きなことを好きなようにやっても何も困らないんだし。」

に：「切符の数でも数えててくれるかな？ もしかすると列車が近々くるかもしれないし。」

り：「近々ってどのくらい先なんですか？ って言うか・・・前回列車が来たのはいつの事なんですか？」

に：「え～～～と～～～????? 確か雪が降る前に紅葉を観に来たとか言って2人ほど客が降りたのが最後かにゃ？」

り：「紅葉って・・・秋ですよ？」

に：「春とか夏は紅葉しにゃいからにゃ。」

り：「それって、、、去年の秋から？もう半年くらい前ですよ？」

り：「その時に降りたお客さんはどうやって帰ったんですか？」

に：「お客さん？そう言えば反対方向へ行く列車は来てにゃい～まだ山の中かにゃ？」

り：「遭難したとか？山の中で行き倒れとか？になってませんよね？」

に：「山を越えて歩いたところにバス停があるから、そこから帰ったじゃにゃいかにゃ？」

り：「山越えてどれくらい歩くんですか？」

に：「3～4日って前に居た駅員に聞いた事があるが？」

り：「えっ？あたしの前に駅員さんがいたことがるんですか？」

に：「いたけど1ヶ月で、暇過ぎです！って怒って他の駅に転属したが？」

り：「確かに暇過ぎですけどね～～～ 毎日掃除とネコの相手ですから～～～」

に：「ネコの相手に不満でもあるのかにゃ？（怒）」

り：「いえ、いえ、そんな事無いです～～～（あるけど・ひそ）」

に：「とにかく、半年に一本くらいはくるじゃろうからにゃ？ 切符切る練習でもしておくかにゃ？」

り：「は～～～～い。」

に：「ごちそうさま。 りおんちゃんのみそ汁は美味しいにゃ。」

り：「お世辞言ってもダメですよ～～～」

食べ終わったにゃん駅長。 今日昼寝ではなく、そのままホームへ歩いていく。

片側のみで追い越し線も無く、来た列車は例え超特急でも必ず停車する田舎駅のホームに出て、左右を見渡す。

に：「にゃんでこんにゃ駅があるんだろうかにゃ？ 時代に取り残された寂れた駅という事で

もにゃいし、都会に通う人が居るわけでもにゃい。 田舎電鉄の創始者が気まぐれで作った、支線とたった一つの駅。 意味があるのか？」

駅の裏山は春の息吹が芽生えて気持ち良い風がそよそよと吹いている。

すぐ近くには溪谷もあり、温泉も無いわけではないが、温泉客はほとんどがバスで行っているらしい。（ネコなんで温泉行きませんから）

に：「おかげでご飯には困らないし、寝るところにも困らない。野良だった頃から考えればいい気分だがにゃ。」

り：「駅長さん、こんなところで何を？」

に：「駅長がホームにいるのに、こんなところ？は無いだろう？」

り：「そうですね？列車が来るのを観てるとかですか？」

に：「いや、今日も列車は来ないだろうにゃ。 来るとすれば午前中にゃ。」

り：「いい風ですね～～～ ほんつとにいい気持ちです～」

に：「近くの温泉でも行ってくるかにゃ？ 美人の湯らしいが？ りおんちゃんは美人だから関係にゃいかにゃ？」」

り：「駅長さん、お上手なんですね。温泉はいいです。 駅のお風呂で十分ですから。」

り：「さ、ホームと駅舎周りのお掃除でもしましょうか？」

にゃん駅長とりおんちゃんでお掃除を始めました。 にゃん駅長は見てるだけですけどね。

り：「はあ～ それにしても、広いホームだわ～～～」

りおんちゃん、今日は朝からホームの掃除を始めたのだが、昼飯を過ぎてもう3時を過ぎようとしているのに、上り下り共用のホームの端から半分程度しか終わっていない。

ただの支線で、半年に一度列車が停まるかどうかという割には無駄に広く、長いホームである。

ただ、それには訳がれっきとした訳がある。

半年に一度とはいえ列車が停まる限りホームの長さは列車以上必要である。

列車が到着して客車の扉が開いて、そこにホームが無かったなんてことはあってはいけないのだから。そして、ここ田舎駅は通る列車が必ず停車しなければいけないという決まりごとがある。

。

そのため都会駅と本線にある本来の田舎駅を結んでいる次世代超特急も停まる可能性がゼロでは無いのだ。次世代超特急は列車の編成が25メートル車両の20両編成である。なので、列車の長さは500メートルになる。当然停車する駅のホームは600メートル近く必要となる。

その基準で田舎駅は作られているのだから、それにホームの幅がまた広い。

車道でいえば、優に3車線はとれるほど広く作られている。

それを端から端までたった一人で掃除しようと言うのだから。本当にこの駅の必要性はどこにあるのか？

そして、昨日まで掃除していた駅舎も停車する全列車に対応するため、できる限り広く大きく作られている。（駅舎の話はおいおいしていこう・・・）

に：「りおんちゃん、掃除の進み具合がどうかにゃ？」

り：「駅長さ～ん、まだまだです～ 半分も終わってませ～ん。 広過ぎるし、長過ぎるんですも～ん。」

に：「超特急仕様のホームだからにゃ～」

り：「その超特急って、停まったことあるんですか～～～？」

に：「話では私が赴任する直前に一回社長が乗ってきたらしい。」

り：「その時に乗降客はいたんですか？」

に：「社長はホームと駅舎の見学程度だったらしいが、5分間停車したらしい。 他には・・・」

り：「他には・・・？」

に：「なんでも、山への登山客が3人と近所の温泉客がたまたまここへ遊びに来ていたので、乗り込んだらしいが。」

り：「と、いう事は3人の下車するお客さんと温泉旅行帰りのお客さんが1人ですか？」

に：「それがいままでの中で最高乗客数だったらしい。」

り：「4人が最高乗客数って・・・ほんとに少ないんですね～」

に：「ただ、その時には駅員がおらずにかなり慌てたらしいぞ。切符を発行する事もできなかったとか。」

り：「車掌さんとかは乗ってなかったんですか？」

に：「車掌は駅の切符の発行はできんからの。社長が乗っていたので臨時で車掌に切符を発行するように手配して事無きをえたらしい。もし、発行できなかったらその超特急は臨時駅員がくる

までこの駅に停車しなければいかんかったからの。」

り：「ふ～ん。あたしがいる間に一回でもいいから列車がきて、乗降客があれば出番ってこと？
ですね。」

に：「そうなるにゃ。」

り：「列車がくるといいな～～～ たまには駅員って感じる仕事をしてみたいです～～～」

に：「そのうちにくるじゃろ、支線に列車が入れば駅に連絡が入るからにゃ。」

り：「それまでにこのホームの掃除が終わればいいな～～～」

に：「そうだにゃ～～～ 切符を発行する機械は動くのかにゃ？」

り：「でも、社長さんはこの駅を見てどんなところか知ってるわけですよね？この駅がいら
ないとは思わなかったんですか？」

に：「さあなあ～～～ 実態を観てなんとも思わなかったんじゃないにゃいのか？ でなきゃこ
の駅の存在価値を知ってるかだにゃ。」

り：「存在価値なんてあるんですか～～～ 年に2回列車が停まれば多いほうって駅に……」

に：「上層部の考えてることは判らんにゃ。 それよりも、掃除掃除！今日中に終わるのか？」

り：「終わりませんよ～～～ 明日もホームの掃除ですね～～～」

その日の夜晩ご飯を食べるとホームの掃除という体力仕事で疲れたのかりおんちゃんは、早々と
眠りについたようです。

にゃん駅長は一人（一匹？）で畳の上で丸くなりながら、今日のことを考えておりました。

に：「今日1日かけて掃除して終わったのが、ホームのやっとなら半分。 残りは明日掃除する
として。。。 明後日は駅舎の掃除か……」

に：「赴任してからずっと掃除仕事ばかりだが、愚痴もほとんど言わずによくやってくれるの
。 りおんちゃんは。わしもそろそろ寝るかの？」

朝日がゆっくりと昇ろうとしている朝。

空気もピンと張りつめている。（これを書いているジブンが好きな時間です）

ホームの掃除半分で疲れたことで早く寝たせいか、朝日が昇る直前になってりおんちゃんは目が覚めた。

り：「う～～～ん、いま何時だろ・・・？」

半分だけ覚めた頭で時計を見ると、まだ5時ちょっと前である。

り：「まだ、5時前か～～～ もうちょっと寝ようかな～～～」

と、もう一度布団を寄せて、、、目を閉じてみた。

少しウトウトとし始めるたところで、ふと物音が聞こえたような気がして目をさます。

り：「あれ？なんか変な音がしなかったかしら？ 駅長さん？朝の散歩でも出かけるのかしら？」

気にはなるのだが、眠いことのほうが勝ってウトウトし始めたのだが、やはり音がする。

り：「やっぱり、音がするわね。起きて確認しましょっと。」

りおんちゃん、布団から起き出して音の正体を確認してみることにした。

実際いままでこんな音がした事は無い。ただ、この駅にきてからこんなに朝早く起きたのが初めてでもある。（いままで音がしていても寝てて気がつかなかった可能性はある・・・）

り：「もう、まだ暗いんだ～～～この時間は。こんな時間にそれもこんな場所で何かしら？」

そろそろと足音を忍ばせて音のするほうに歩いていく、りおんちゃん。

幽霊とかお化けとかということは考えないだろうか？

音は確実にしている、そして音の場所と思われるところに着いたところ、そこにはにゃん駅長が一匹で土を掘っている。聞こえた音はにゃん駅長が土を掘っては埋めている音だったのだが。

り：「何してるのかしら？ 土なんか掘っちゃって。」

にゃん駅長は一心不乱に土を掘っているでもなく、掘りながら、考えたり、一旦掘ったところをうめたりしている。

り：「どうしよう？声かけてみようかしら？」と見ては考えていた。そうこうするうちに・・・

に：「誰かいるのかにゃ？ いるとしたら、りおんちゃんか？ 何してるんにゃ？」

にゃん駅長に気付かれては隠れて見ている理由も無い。出て行って声をかけてみた。

り：「駅長さん。何してるんですか？ 土を掘ったり、埋めたりして。」

に：「ん？これか？ りおんちゃんはネコの習性をしらんのか？ トイレの後始末を。」

り：「・・・・・・・・・・あ・と・し・ま・つ・・・・・・・・・・ですか？」

に：「ネコはトイレの後始末で土をかけるのだぞ。」

り：「それは・・・聞いたことがあります、何もこんな朝早くから・・・」

に：「朝早いとか遅いとトイレに行きたいかどうかは関係無いと思うが？元々トイレは外でしてるからにゃ。 りおんちゃんこそ朝早いにゃ？今日は。」

り：「昨日早く寝たから、眼がさめちゃって・・・」

に：「仕事の時間まではまだあるから、もう一回寝るか、風呂でも入ってきたらどうだにゃ？」

り：「そうですね～～～ でも、寝るにはちょっと遅いから、お風呂でも入ってきま～す。」

り：「こういう時に温泉掛け流しはいいですね～ 沸かず手間もいらぬし～」

り：「駅長さんも一緒に如何ですか？ 長い事身体洗ってないでしょ？」

に：「ネコは風呂なんぞ入らんのだ！ 水は嫌いじゃ〜〜〜」

と、叫びながら走っていくにゃん駅長だったが、りおんちゃんは特に気にする様子もない。

部屋へ戻ってお風呂に入る事にした。

田舎駅の近くに温泉があって温泉客がくることがあるのだが、その温泉は駅舎のお風呂にも当然のように引かれている。しかも厳選掛け流しという贅沢な施設になっているが駅員がいなかったときは誰も使うことがなく、無駄になっていたのだがりおんちゃんに来てからは、朝晩と温泉に入っている。

旅館並の浴場の大きさを源泉掛け流しなので、湯船には常にお湯がはられている。何とも贅沢な駅勤務ではある。

温泉から出て朝ご飯の支度を始めるとにゃん駅長が台所に来た。

に：「今日の朝ご飯はなにかにゃ？」

り：「今日はアジの干物にしましょうか？」

に：「そうしてくれにゃ。今日はちょっと山に行ってくるからにゃ。」

り：「山にですか？ 用事って山の中に何かあるんですか？」

に：「いちおう駅の見回りも駅長の仕事だにゃ。」

り：「そんなものなんですか？ さ、できたからご飯にしましょ。」

に：「そうしようかにゃ。」

さあ、にゃん駅長、たまには仕事をしているようで。

でも、周囲の山の見回りって・・・駅長さんの仕事なんではないかな？

珍しく昨日の続きのお話です。

に：「やっぱり、ご飯に焼いた魚で暖かいみそ汁をかけてもらうご飯が一番美味しいにゃ。」

り：「駅長さんは、キャットフードとか食べないんですか？ テレビコマーシャルとか見ると美味しそうですけど？」

に：「りおんちゃんが、食べたいなら本社に頼めば送ってくれるにゃ。」

り：「別にあたしは食べたいなって言っていないじゃないですか・・・駅長さんはどうなのかな？と思って聞いただけです。」

に：「キャットフードは栄養とかはいいらしいが、どれを食べても味に大差ないような気がしてにゃ。それに何が入っているか判らんし。合成なんとか？とかいうじゃろ。」

り：「人間が食べる缶詰めでも似たような味のものが多いですからね～まして、キャットフードじゃどんな味が判りませんしね。」

に：「そうそう。にゃから、自然のものが一番にゃ。ここのお米、野菜、味噌は近場の農家で作っているモノだし、水は山からの湧き水を引いてるし。魚は山をいっぱい越えた港から運んでくるからにゃ。」

り：「すいません。近場の農家？って言いました？」

に：「この近くで農業をやっている集落があるんだにゃ。」

り：「近くってどのくらい近いんですか？」

に：「山を越えて途中で一晩野宿すると集落に着くらしいにゃ。人間の足で。でも、バス停より近いにゃ。」

り：「はあ・・・確かにバス停よりは近いですが、限りなく遠いですね。ここはどこへ行くにも、山越えなんですね。」

に：「駅の横の沢を下って、川下りで1日あれば温泉宿に着くって話も聞いたことはあるが。もっとも、相当危険な川下りで成功したものはいないという話にゃ。」

り：「それって、、、ほんつとにここは陸の孤島なんですね。」

に：「そういう駅でもなければ、ネコに駅長をやらせようなんて思わんじゃろ。」

り：「それもそうですね～～～なんとなく意味なく納得できる理由です。」

に：「さて、ご飯も食べたし、朝の漫才も終わったし、周りの山をみてるにゃ。」

り：「朝の漫才ですか？あたしとの会話が？」

に：「それ以外になにがあるんじゃ？ 帰りはたぶん夕方か日が沈んでからになるから夕飯はいらにゃいにゃ。」

り：「お夕飯はどうするんですか？」

に：「山で狩りでもするにゃ。元は野良にゃから。」

り：「あたしは??？」

に：「切符の枚数とか販売機のちょうしとか見ておいてくれればいいにゃ。あと、駅の売店のお土産の在庫も数えててくれ。」

り：「は～～い。」

後片づけをしている間にゃん駅長は山の中へ入って行ってしまいました。

りおんちゃんは独り言を言いながらにゃん駅長に言われたとおり、駅での仕事を始めます。

り：「切符の枚数って自動販売機の在庫かな？ あれ？販売機が無い。 あ〜〜変なところに切符の形をした厚紙があってなんか印刷されてる。。。切符ってこれ？」

そう、ここの駅は創立当初から新しい機械を一切入れずに昔のスタイルを取り入れた駅になっているのです。切符は昔のスタイルの厚紙タイプで、行き先が印刷されたもの。

だから、種類は多いし（行き先ごとにありますから）数えるのも一苦労。

何とかカントか種類ごとに分けて数え終わったのは、昼近くになってからでした。

り：「もう、お昼近くか〜〜 お昼ご飯の準備しなきゃ。」

そういうと台所へ立ち昼ご飯の支度を始めました。

ここの駅舎にある宿泊施設とか台所はとても贅沢にできているので、冷蔵庫もかなり大型のモノが入っています。また、野菜は天然の状態に保つために地下室が掘られていて、そこに保管してあるのです。

り：「う〜〜んと、たまには洋風にオムライスでも作ろうかな〜」

冷蔵庫から卵を出して、野菜を刻み朝の残りのご飯をチャーハンにしたててオムライスを作りあげました。

り：「いただきま〜〜す。」

り：「やっぱり、駅長さんもいてくれたほうが賑やかよね〜 ネコとはいうけど。一人だとつまらないな〜」

昼ご飯を終えて、午後からは売店に行ってみることにしました。

滅多にみない乗降客のための売店と割り切ったのかかなり小さい店舗になっていました。

さて、売店まできてみたりおんちゃんですが、売店のドアもガラスも閉まったまま、長い事開けたことがないようです。正確には「前回乗降客があった時以来。」ですね。

ですから、既に半年は経過しているということになります。

り：「半年も開店しない売店っていうのもかなりレアよね～ 食品とかはもう腐ってるんじゃないかしら？」

そうってドアの鍵穴に鍵を差し込んで鍵を開けると・・・・・・・・開きません。

り：「変ね？ 売店の鍵はこれだって駅長さんから聞いているから間違っていることはないだろうし、鍵が錆びついているのかしら？」

そう言ってもう一度鍵を鍵穴に差し込んで回そうとしてみましたが、開く気配はありません。

り：「おかしいな～～～ 駅舎の玄関、改札口、切符売り場の窓・・・・・・・・」

そう言いながら、鍵を一つずつ確認してみましたが、やっぱり残った鍵はその一つだけです。

そして、もう一度鍵穴に差し込んでみましたが、やはり廻る気配はありません。

り：「変ね～～～ でも、この鍵が開かないと売店の確認とかできないし～～～」

鍵を差し込んで回してみる、反対側に回してみる、奥まで差し込んでから引いてみるなど、いろいろと試してみましたが、鍵は全然開く気配はないのです。

り：「どうしよう～～～ これやっとなないと駅長さんに怒られちゃうかも。でも鍵が開かないから中に入れないし・・・」

りおんちゃんは鍵の束を持って売店の入り口の前で考え込んでしまいました。

あれこれ考えてはみるのですが、どうしても入り口にかかった鍵を開けることはできなさそうです。

ちょっと考えてから、、、もう一度売店を見えることにしました。

り：「ホントに小さな売店よね～～～ 駅長さんはお土産って言ってたけど、こんな田舎の駅にお土産なんて何があるのかしら。」

ブツブツと言いながら売店の周りを歩いてみると、窓にもう一つの鍵穴らしきものがみえました。

り：「あれ？この穴は何かしら？ 鍵穴にもみえるけど？」

そう言って手にしていた鍵を差し込んでみるとサイズはぴったり、回してみると手応えがあります。

「カチャン」と小さな音をだして鍵は回りました。でも、窓を手で開けようとしても開く気配はありません。

り：「変ね～～～ 確かに鍵が開いたような気がしたんだけど、窓が開く気配も無いし。。。」

気を取り直して売店の周りを一通り一周してからもう一度ドアの前にきてみました。

そして、これでダメなら諦めるつもりで鍵を鍵穴に差し込んで見ると先ほどはかすかに感触が違います。試しに回してみると、手応えとカチャンと小さな音がして今度は開いた感触が手に伝わってきました。

そして、ドアに手をかけると開けることができました。

り：「これってどうなったのかしら？ もしかして、窓のところにあった鍵を開けないと、ドアの鍵が開かないパズルのような仕組みになったのかしら？」

売店に入ると狭い中にはいろいろなモノが積んであります。

文具、ライター、タバコ、飲み物などなど。もちろん新聞とか雑誌とかは無さそうです。

り：「飲み物とかは消費期限をちゃんとみておかないとダメだよね。 えっと、消費期限は
とと・・・来年の10月か。 まだ、大丈夫よね。 でも、田舎の駅にしてはいろんな物が置いて
あるのね。 さすが新聞とか雑誌は無いみたいだけど、文庫本はあるんだ～～～」

消費期限の無いものも数とかを数えて一つずつノートに記入していきりおんちゃんです。

り：「ほんとに食べ物とか飲み物は数えるまでもないくらい少ないわね～ ま、お客さんもない
事だし。でも、ドアも窓も閉まったままで人も入らないから、埃もほとんどないわね。 軽く
拭き掃除でもしておきましょうと。」

台所で雑巾を搾って売店の在庫を調べてノートに記入、さらに品物の埃を軽く拭き掃除で拭いて
いきます。

り：「ところで、お土産ってどれかしら？」

みたところ、お土産らしいものはどこにも見当たりません。

り：「食べ物じゃないだろうし、木彫りとかの人形でも無さそうだし、ここのお土産っていった
いなんなのかしら？」

ひとつおとり片づいたところで、売店の一番窓側に見た事もないような包みが置いてあります。

り：「あれかしら？ なんかちゃんと包んであるのはあれくらいしか無さそうだし・・・」

手をのばしてその包みを手に取ってみることにしました。

ちょっと小さめですが、重みを感じる包みです。

り：「何かしら？ 他に3つほどあるみたいだけど・・・」

気になるりおんちゃんはそのうちの一つを開けてみる事にしました。

り：「包み紙を破らないようにしないとね。 あ、箱がでてきた。 これを開ければ・・・」

と、いって開けた箱の中からでてきたのは、どこにでもありそうな石。 ちょっと角張っては
いますが、どうみてもその辺に転がっていきそうな見た目ただの石です。

り：「石がお土産って・・・何かこの石にあるのかしら？ 駅長さんが帰ってきたら聞いて
みましょ。」

そうこうしているうちに、午後の仕事も終わりましたが・・・

り：「そういえば、この調べた在庫ってどうすればいいのかな？お土産も調べといてって言われ
たんだし。」

り：「駅長さんが帰ってからね。」

そういうと、夕飯の支度を始めることにしました。

制服から私服に着替えて、お風呂に入ってから夕飯の支度をしています。

り：「今日も掃除だったけど、なんか毎日新しい発見があってワクワクする駅だわ。ここ。」

り：「でも、駅長さん遅いわね～～～」

そういえば、にゃん駅長さんかというと朝ご飯が終わってから、山に入ったきりですが、どこへ行ってるんでしょう？

に：「ここんところ山にもきてにゃかったからにゃ～ 季節も変わって少しは変わったのかにゃ？」

独り言を呟きながら、山道ならぬ獣道を進んでいきます。

ところどころ、日陰で湿ったところとかも歩いていきます。。。

に：「とりあえず山の中にはあんまり変わったところはなさそうだにゃ。 もっともここらへんにくる人間はほとんどいないし、他の動物もあんまりこないし。」

に：「そこんところが気に入ってここらへんを縄張りにしてるといいんだけどにゃ～～」

に：「そろそろ裏山の頂上に着く頃にゃ。 そこまで行けば周りもみれるからたまには見てみるかにゃ。」

そう、田舎駅の裏山は駅の近辺で一番高い丘になっていて、周囲を見渡すにはちょうどいいところになっています。 頂上からの見晴らしは良いし、ちょっとした木の元で休む事もできます。 なにより駅から人間の足で山道を登るとほぼ1時間ほどの行程なのでちょうどいいハイキングコースになっているのです。

ただ、駅員さんは例え列車がこなくても駅での勤務があるので、勤務中に登ってくるということはできません。 にゃん駅長は周囲の見回りという名目でここへ登っては木の根元でのお昼寝をしているのでした。

に：「いい天気だし、風もそよそよと吹いていい心地じゃにゃ～ 少し昼寝でも・・・」

あらあら、言葉終わる前にすでにくーくーと寝てしまいました。

寝込んでからほぼ4時間ほど、さすがに眼をさました。

に：「ふあ～～～ よく寝たにゃ～～～ どれどれ、少しは周りを歩かんとにゃ。」

そういうとまた獣道を歩き出しました。 にゃん駅長、周囲の見回りと言ってはいますが、実はジブンの縄張り確認だったんですね???

に：「周囲の山は全部おいらの縄張りだからにゃ。 変なのが入ってこられても困るにゃ。」

ぶつぶつ言いながら歩いていると、沢にでました。 この沢には魚とか小動物が多く野良だった頃にはここで食べ物を調達しておりました。 いまでも野良の頃を思い出してはちょこちょこと来ては狩りをしているようです。

に：「ご飯の時間～～」

そういうと突然沢の周囲をそろそろと歩き出し、狩りの準備を始めたようです。

りおんちゃんには水が嫌いと言いましたが、にゃん駅長、実は沢の流れに入って魚を捕ることもしているようです。 さっそく魚を捕まえています。 狩りがお上手なんですね？

に：「野良だった頃にはほぼ毎日ここで狩りをしていたからにゃ。 取れないとお腹が空いて動けないからにゃ～～」

なんとも説明ともつかないような独り言を言っていますが、物語の説明をしてくれるのは助かりますね。

魚をたいらげてからまた沢の周りを抜き足で歩いて、サワガニとかを捕まえている間に身体は適

当に谷川のせせらぎでキレイになったようです。 お風呂がいない理由もこれだったんでしょうか？

にゃん駅長の毛並みがつやつやしているのも、谷川のせせらぎで自然と洗われていたことが理由のようです。 そして、毎日寝てる割にはスリムな体型もここでの狩りを楽しむために維持しているかのようです。

ひととおり狩り？食事？運動？を楽しんだにゃん駅長、こんどは沢の近くの岩場でごろんと横になり、お昼寝の時間になったようです。

木陰で柔らかな日差しが差し込む岩場で身体を乾かす日向ぼっこならぬ、昼寝をぞんぶんに楽しんでいるご様子。

にゃん駅長が眼をさましたのは日もそろそろ沈もうかという夕暮れ近くになってからでした。

に：「にゃ〜〜〜 よく寝たにゃ。 そろそろ駅にもどろうかにゃ。」

そういうと、来た道とは違う獣道に入って駅へむかうにゃん駅長でした。

に：「あんまりキレイなままで戻ってもつまらにゃいから、藪でも通って近道でもしようかにゃ。」

そういうとちよいと道を外れて藪の中へ消えていきました。。。

に：「ただいまにゃ〜〜〜」

り：「お帰りなさい〜い。 駅長さん、お疲れさまでした〜」

に：「何も変わったことはにゃかったかにゃ？」

り：「なんにもありませんでした〜 売店の中もみておきました〜」

に：「ご苦労さんだったにゃ。」

り：「ところで、ここのお土産ってただの石なんですか？」

に：「そうなのかにゃ？」

り：「駅長さんも知らないんですか？」

に：「人間の買うものに興味があるわけにゃいにゃ！」

り：「それもそうですね〜〜〜 不思議・・・」

石がお土産？なんだか奇妙なことばかりがある、田舎駅ですが、さらに疑問が増えたようです。

り：「ところで、駅長さん。 在庫は調べたんですが、これはどうすればいいんですか？」

に：「あとで、本社の広告部に連絡を入れたい欲しいにゃ。 少ない在庫を送ってくれるから。」

り：「在庫を奥ってくれるという事は、配送のために列車が来るんですか？」

に：「配送のためだけに列車がくるわけではないにゃ。 たぶん、宅急便で・・・」

定期的に列車がくるのであれば、列車に載せてくることもできるんでしょうけど、なにしろ変な駅ですからね。 それにしても宅急便とは。

り：「でも、宅急便の人ってどうやって配達するんですか？ 山越えしてですか？」

に：「いったん、下の温泉宿に届けてもらって保管しておくらしいにゃ。 その後はどうなのかにゃ？」

り：「配送のときって見たことないんですか？」

に：「あんまり興味ないし・・・ 前の配送は列車に載せてきたらしいにゃ。」

り：「じゃあ、次の配送も列車かもしれないね。 配送のための特別列車かも？」

に：「そうなるといいにゃ。 在庫の連絡は駅の事務室にあるファックスで入れといてくれにゃ。」

り：「メールとかは無いんですか？ ここは？」

に：「そんなハイカラなものは整備されてにゃいから。 電話があるだけにゃ。 ちなみに携帯電話も圏外になってるはずにゃ。」

り：「そういえば、ここに来てから一回も携帯電話に着信したことがないですね・・・ それって、圏外だったんですか？」

そうって携帯電話をみてと確かに圏外の文字が・・・・・・・・

駅と線路と自然がたっぷりの田舎駅でりおんちゃんはどうなるのでしょうか？

田舎駅に列車が？

東の空がだんだんと明るくなってきました。

そろそろ、にゃん駅長が起き出してくる時間です。

朝起きてからなんとなく改札をでてホームの真ん中に立って、ホームの左右をじっと眺めるのが日課になっているようです。

に：「こないのは判っているんだにゃ。 だけど、なんとなく来そうな気がしてきているんにゃ。 ま、今日もこないと思うんだけどにゃ～」

そのまま、ホームで周囲を眺めています。

に：「周囲の山の色も変わってきたんにゃ～～～ そろそろ、春らしい恵みがでるころにゃ。」
田舎駅の周囲は山だらけなので、季節の景色をぞんぶんに眺めること、楽しむことができるのです。 そのためここ田舎駅で降りることができた幸運？不幸？なお客さんは、その季節の風景を見ながらキャンプを楽しむことができるのです。

そのとき、駅舎の中で何か音がなりました。

に：「にゃ？ あの音は？」

そう言いながら駅舎の中に入っていきます。

駅舎の事務室にある青いランプが点灯していました。

り：「駅長さ～ん、おはようございます～～～ これはなんの音ですか～～～？」

に：「りおんちゃん、列車がくるみたいだにゃ。」

り：「え？え？え？ 列車がくるんですか？」

に：「この音と青いランプが列車がくる信号だにゃ。 どんな列車がくるのかにゃ？」

り：「どのくらいで来るんですか？」

に：「そのランプの下に時計があるにゃ。 その時計の下のカウンターがくるまでの時間にゃ。」

り：「えっとお、120って事は・・・？」

に：「120分後にホームに入ってくるにゃ。 切符の用意と改札の用意をしにゃいとにゃ。」

り：「え・え・え・・・っと、どうすればいいんですか？」

に：「まだ、時間はあるからパジャマから制服に着替えたほうがいいにゃ。」

り：「えっ？ あっ、そうですね。。。 パジャマじゃダメですよ？」

に：「列車がくるからにゃ。 制服着てないとお客さんだか駅員だか判らにゃいにゃ。」

り：「は～い。 着替えてきます～～～ お化粧もしないと。」

に：「お化粧しにゃくても、りおんちゃんはキレイだからいいんじゃないにゃいか？」

り：「もう！駅長さんはネコなのにお世辞が上手くて困ります。」

そういつて駅舎に入っていくりおんちゃん。

何しろホントに久しぶりに人と会うので。 また、初めての駅員として乗降客の相手をする事になるかもしれないのです。

にゃん駅長は事務室から駅長の証である帽子を出してちっちゃい頭にかぶります。

りおんちゃんは制服に着替えると切符の用意と鉄の用意を始めました。

そして、朝ご飯を食べてから駅の事務室で待機していました。

り：「列車がくるなんて、ホントにドキドキ、ワクワクするな～ 駅員になって初めてお客さんとお話するかもしれないし、他の電鉄の人ともお話ができるかもしれないし。」

期待に胸をふくらませて一人妄想を開始するりおんちゃんの様子をにゃん駅長はじっと見つめていました。

に：「りおんちゃん、りおんちゃん、りおんちゃんってば。 聞こえてる？」

り：「えっ??? 駅長さん何か言いました？」

に：「まったく・・・妄想ばかりで・・・準備はできたのかにゃ? 切符、売店の鍵、鋏、お金の準備とかとか、やることは一杯あるにゃ。」

り：「そういう駅長さんは準備はいいんですか？」

に：「私はこの帽子をかぶって、ホームのベンチに腰掛けているのが、列車がきたときの仕事だにゃ。」

り：「え～～～、それだけでいいんですか～～～ いいな～～～ 簡単で。」

に：「ホームのベンチで座ってるだけでも疲れるにゃ。 お客さんがきたら愛想の一つもしにゃいとだめだからにゃ。」

に：「そろそろ、列車が入ってくるにゃ。レールを走ってくる音がするにゃ。ホームにでて準備にゃ。」

り：「は～～～い。 じゃあ、ホームにでて列車のお出迎えですね。」

そういうと一匹と一人は事務室を出て改札を抜けてホームにでてみました。

ほどなくホームの先に列車の先頭車が見えてきました。

今日田舎駅に入ってきたのは、普段は田舎と都会を結ぶ、高速特急でした。

り：「うわ～～～カッコいい～ですね～。 高速特急なんて普通の列車とは違って特別なんですよ～」

に：「超特急とは違っているが、この田舎電鉄の看板列車だからにゃ～～」

り：「いいな～～～ 田舎電鉄に入社する人の半分はこの高速特急に憧れて入ってくるんですよ～」

り：「どんなお客さんが乗っているのかしら？」

二人が話していると高速特急はホームに音もなく滑り込んで停まりました。

そして、二人は列車の最後尾に行き、車掌さんに声をかけてみることにしました。

車掌さん（以後、し）：「こんにちは。田舎駅駅長さんとえっと・・・新任のりおんさん？ だけ？」

に：「ご苦労様。 今回は何分くらい停車の予定にゃ？」

り：「初めまして。新任のりおんです。」

し：「これはこれは、可愛いにゃん駅長と負けないうくらい可愛い駅員さんだね。今回はいちおう10分ほど停車の予定です。駅事務室で休ませてもらってもいいですか？」

に、り：「どうぞ、お茶でも入れますから。 あっ、運転手さんも一緒にどうですか？」

し：「じゃあ、ちょっと無線で呼んでみるか。 ちょっと待ってね。 うん、うん。了解。」

し：「失礼してちょっとお茶でも頂くとします。 なに、発車時間が遅れても問題は無いし。」

り：「え？遅れても大丈夫って？」

し：「この支線に入った時点で時刻表とおりの運行が無理だからさ。事故が起きなければ遅れても問題にはならないのさ。 田舎駅に停車したときにはいつもそうだから。」

り：「ふ～～～ん、そうなんですか・・・ この駅は全ての時刻の束縛を壊す駅なんですよ。」

に：「りおんちゃん、先にいってお茶を入れてくれにゃいかにゃ？」

り：「あっ、そうですね。じゃ、先に行ってます。」

に：「じゃあ、ぼちぼち事務室に行くにゃ。」

し：「そうですね。 自分も車掌になってかなりの年数ですが、いままで田舎駅に停まったのは今日で2回目です。」

車掌さん、運転手さん、にゃん駅長とそろって駅の事務室に入ると、りおんちゃんがお茶とお菓子の準備をして待っていました。

し：「時刻に束縛が無いとはいえ、お客さんの手前、余り長居はできないけど、お邪魔します。」

り：「ささ、どうぞ。」

運転手さんと車掌さん、二人も久しぶりに人と話ができることで、りおんちゃんも心なしか生き生きとしてみえます。

運転手さんと車掌さんはこんな田舎駅で暮らしてるりおんちゃんが不思議でなりませんでした。

田舎の駅で話し相手はネコ一匹。 まともな駅員の仕事もなさそうなこの駅で退屈はしないのか

?など、りおんちゃんへの質問もできてきたのです。

そうこうしているうちに時間は過ぎてそろそろ列車の発車時刻が近づいてきました。

し：「さて、、、短かったけど楽しい話ができよかった。そろそろ発車の時刻だから行きま
すね。」

に：「お疲れさまにゃ。」

り：「あ〜〜あ、行っちゃうんですね。お気を付けて。」

し：「ありがとう。それでは。」

そういうと、運転手さんと車掌さんを見送るために一緒にホームにでました。

他のお客さんで外に出てきた人はいないようです。でてくれば、必ずホームからは見えるから
です。

そして、りおんちゃんの駅員としての初仕事はなんと！ホームでドアを閉めるときに鳴るあの
音楽、そう発車ベルのスイッチを押すことでした。にゃん駅長が乗降客はいないけど、決まり
だから。という事で鳴らすことになったのです。発車ベルが鳴り、車掌さんへドアを閉める合
図を送ります。

その合図で車掌さんがドアを閉めるスイッチを入れました。

車掌さんも列車の最後尾に乗り込みドアが閉まった事を確認して、運転手に発車の合図を送り
ます。

ぷおーー先頭列車から発車の合図を知らせる音が鳴りました。

プシュー！大きな音とともに列車が動き出します。

し：「お世話様でした。お二人もお気を付けて。この田舎駅を守ってくださいね。」

そう言うとき車掌さんは最後尾のドアの中へ入って手を振ってくれました。

一匹と一人は走り去る列車をホームで見えなくなるまでみていました。

に：「さて、今日の仕事は終わりでいいにゃ。りおんちゃんも休んでいいにゃ。」

り：「は〜い。列車がくるだけで疲れちゃいますね。でも、車掌さんも面白い人でしたね。

また、きてくれるといいな〜」

に：「次に列車がくるのはいつの日かにゃ〜〜〜」

さてさて、慌ただしく田舎駅に入り、慌ただしく田舎駅を発車した高速列車。

その走り去る高速列車が見えなくなるまで、ホームで見送っていたにゃん駅長とりおんちゃん。
に：「さて、列車も見えなくなったし、今日の仕事はこれで終わりにしようか。」

り：「普段と違うことが起きると疲れるものですね。でも、楽しかったな～ 田舎電鉄の他の人と話もできたし、何より発車のベルを鳴らせるなんて、最高！」

に：「発車のベルは田舎駅に列車が来ないと鳴らすことができないからにゃ。貴重な経験にゃ。普通の駅だとどんなに早くてもホーム係りになるのに3年はかかるらしいからにゃ。」

り：「それを入社して3か月できるなんてラッキー！なんですか？」

に：「ここに配属されたからできたんにゃ。」

り：「次の列車はいつくるんでしょうね？ また、押してみた～い。」

に：「規則では列車の発車の時に安全を確保した、時にしか鳴らしちゃダメなんだが、ここではいくら鳴らしてもどこにも迷惑がかからにゃいから好きなときに押してみてもいいんじゃないか？」

り：「でも、列車もないのに鳴らすのは変ですよ。次に列車がくるまで待ちます。」

に：「好きにすればいいにゃ。にゃんは事務室に戻って寝るからにゃ。」

り：「お昼寝ですか？ お休みなさいませ。」

に：「にゃ。」

軽く答えてにゃん駅長は駅舎の事務室に入っていました。

りおんちゃんにはにゃん駅長から今日の仕事は終わりと云われているので、これから特にすることもありません。

り：「どうでしょう？ 列車が着いたり発車したりしたから少し疲れたけど、まだお休みするには早いし・・・と言って特に・・・」

り：「お風呂にはっちゃおーっつと。」

そういうと、ホームから駅舎に入ってお風呂場に急行。そそくさと制服を脱いで温泉に浸かることにしたのです。

り：「あ～～～、いいお湯だわ～～～ この温泉は。お風呂も広いし、お湯加減もちょうどいいし。田舎駅でしか経験できないわね。」

どっかの温泉旅館並みの広い風呂と源泉かけ流しの温泉で気持ちよくないわけがないってものですよね～～～

り：「さ～～～、、、今日はいい経験だったわ～。初めて駅員らしい仕事もしたし・・・ベル鳴らしたただけだけどね。」

でも、なんとなくりおんちゃんは少し不満そうです。

り：「久しぶりに他の人と話ができ楽しかったな～ でも、、、なんで、ここで楽しい？って聴かれたのかしら？」

り：「にゃん駅長さんは大事にしてくれるし、駅の周りは自然いっぱい見ていて飽きないし、駅の仕事もお掃除が多くてちょっとうんざりすることもあるけど、のんびりできていいんだけどな～ 何といってもこの温泉が一番だけどね～」

りおんちゃん、かなりここ田舎駅での仕事がお気に入りのようですね。

り：「駅長さん以外に話し相手がないのは、何とかして欲しい気もするけど、他の人がいないってのも悪くないんだけどね～」

ちょっぴり寂しい感じもこの雰囲気はだいぶ慣れてきたようですね～

温泉でゆったりしたりおんちゃん、こんどは制服から私服に着替えています。

ここに常駐している駅員はおんちゃん一人なので、お風呂場には私服を予備で置いているようですね。

着替えを済ませると制服を駅舎に持って行って備え付けの洗濯機に入れてからスイッチを入れます。

り：「いつ、なにがあるかわからないから、制服はちゃんとキレイにしておかないとね。」

り：「そういえば、、そろそろお昼の時間ね。 なににしようかしら？」

に：「何を考え込んでいるだにゃ？」

りおんちゃん、突然声をかけられてびっくりしたようです。

り：「きゃ——！ って……あ、駅長さん？ あ————びっくりした。」

に：「あ————耳が痛いにゃ…… 驚かしたようで悪かったにゃ。」

り：「すいません。 てっきり寝ているものだと思ってたので、ちょっと驚いちゃいました。」

に：「で、何を考えてたんだにゃ？」

り：「今日起きたいろんなこと、いままでの事。 一番は今日のお昼ですけどね。」

そういうとニコッと微笑んで、にゃん駅長を抱きかかえました。

り：「ほんつとににゃん駅長さんって良い毛並みですよ～ フワフワと温かくて柔らかくて、駅長さん抱いているといい気持ちになるんですよ～」

に：「話し相手くらいにしかにゃらにゃいけどにゃ。」

り：「ううん、それで十分です～ ホントに田舎駅っていいところですね。」

そういつてりおんちゃんにはにゃん駅長を抱いたまま、台所にむかって歩き出しました。

り：「駅長さんはお昼はいらないんですたっけ？」

に：「ネコは一日二食で十分にゃから。」

り：「じゃあ、あたしの分だけ作っていただきます。」

りおんちゃん、にゃん駅長を床におろしてお昼ご飯の支度を始めました。

り：「でも……やっぱり作っちゃうから、駅長さんも一緒に食べませんか？」

に：「りおんちゃんに云われたじゃしょうが無いにゃ。」

り：「じゃあ、、アジの干物を2枚焼いちゃおうかな？ あたしの分と駅長さんの分と。」

に：「ご飯に載せて味噌汁もかけて欲しいにゃ。」

り：「はいはい。 わかりました。 ご飯と味噌汁もありますよ。」

そういつて、ジブンの分とにゃん駅長の分のご飯と味噌汁をよそってお盆に載せて、事務室の隣の和室に運びました。」

そうしてから、焼いたアジの干物をお皿に載せてきて、にゃん駅長の分はご飯の上に載せて味噌

汁をかけて、駅長の前に置いてあげます。自分はアジの干物に醤油を軽くかけて食べる準備は大丈夫。ちゃぶ台には他に漬物が載っているだけの質素な食事内容です。

に：「いつもおかずはそのくらいしかないけど、お腹は空かないのにかにゃ？」

り：「あたしはこれで十分なんです。あんまりお腹は空かないのよね。」

に：「食べ過ぎて太ってもつままないからにゃ。りおんちゃんはいまのくらいが一番可愛いからにゃ。」

り：「またまた〜〜駅長さんって、昔人間だったんじゃないですか？お世辞が御上手なんですもの。ネコさんはお世辞ってないですよ？」

に：「ネコの世界もそれなりにお世辞のひとつも言えないと住みにくいんにゃ。見てるほど気楽な世界じゃないにゃ。」

もとは野良だったにゃん駅長ですが生きるにの苦勞もしているようですね。いまは駅長さんって気楽なところで過ごしているみたいですけどね。

そのまま、いつものように他愛もない、取止めのない話をしてお昼ごはんの時間を過ごしました。

食べ終わると……

に：「眠いにゃ〜〜」

り：「あらあら、そういえば今日はお昼寝してませんものね。」

にゃん駅長、何を思ったのか既に半分寝ぼけているのか、そろそろとりおんちゃんの膝の上に乗って、そのままスヤスヤと寝込んでしまいました。

り：「あ〜あ、ここで寝られたなじゃ、お片付けができないわ。でも、あたしも眠くなったから〜〜」

そして、りおんちゃんもそのままにゃん駅長を膝に乗せたまま、寝込んでしまいました。

り：「あれれ？　ここはどこかしら？　なにか靄がかかったようで、何も見えないんだけど・・・」

に：「りおんちゃん、そこへ座りなさい。」

り：「駅長さん、どうしたんですか？」

に：「いいから。　そこへ座りなさい。」

り：「なんか、普通の駅長さんは違いますね。　大きさも大きいみたいだし。」

に：「私が大きくなったのではない。　りおんちゃんが小さくなったのだ。」

り：「ほんとだ～　目の高さが一緒ですね～　駅長さん大きい～　大きくてなんか怖い～」

に：「それでは、今までの駅勤務の審査を開始する。」

り：「えっ？　審査って何ですか？」

に：「今後も勤務できるかどうかの審査だな。　簡単にいえば。」

り：「え～　そんなの早すぎますよ～　まだ、そんなに日も経って無いのに～」

に：「いいから。　審査を開始する。　まずは・・・」

り：「そんなの待ってくださいよ～　あたしはまだまだこの駅に居たいんです～～～」

に：「痛いじゃ！　りおんちゃん、寝ぼけてるんだにゃ！」

り：「えっ？えっ？　あれ？　駅長さんたら元の大きさのままですね？　さっきはあんなに大きかったのに。」

に：「だ～か～ら～　寝ぼけてるんだにゃ。　寝ぼけるのはいいにゃ。　でも、毛を引っ張らないで欲しいにゃ。」

り：「あら～～～　すみませ～ん。　あたしったら・・・」

に：「いったいぜんたい、どんな夢をみたんだにゃ？　大きくなったの、小さくなったのって。」

り：「あ、いえ、あの～　その～」

どうやら、ご飯を食べてからにゃん駅長を膝に載せたまま、居眠りをしてしまったようです～そして、夢の中でにゃん駅長にしがみついたところ、膝の上のにゃん駅長の毛を引っ張ったと、いう事らしいですね。

バツが悪いりおんちゃん。　そのりおんちゃんを不思議そうに見上げるにゃん駅長。　傍から見るとほのぼのとしたいい風景ですが、とうのりおんちゃんはどう云おうかちょっと考え中のようです。

なかなかいい言葉が見つからず、答えに戸惑っているとにゃん駅長。

に：「いいんだにゃ。　夢のことは云えない事もいっぱいあるもんだにゃ。　ちょっと散歩に行ってくるにゃ。」

そう云うとにゃん駅長は、駅舎の事務室を出て外に行ってしまいました。

り：「あ～恥ずかしかった。　巨大化したにゃん駅長さんに審査されてた、なんて云えないもん。」

そう言ってほっと胸をなで下ろすと目の前にうつるのは、ちゃぶ台とお茶碗。

り：「いっけない！ご飯食べてそのままほっといたから、ごはん粒が干からびてくっついてる！」

り：「早く水に漬けて洗わないと大変～～～」

そういうと慌ててお茶碗をまとめてお盆に移して台所へいくと、お盆の中のお茶碗やらお皿を流しに置いてある流しおけに一気に入れた、りおんちゃん。

次に響いた音は・・・パリーン！！　と音を立ててお茶碗やらお皿のほとんどが割れてしまいました。　いつもなら、水がはってあるのですが、今日に限って車掌さんと運転手さんに入れたお椀と急須を洗って流したまま、水をはるのを忘れてしまっていたのでした。

り：「アチャ～～～　どうしよう・・・　他にお茶碗あったっけ？」

台所にある棚やら流しの下の棚とかを探しましたが、あったのはお皿が2枚。

り：「駅長さんのご飯はこのお皿でいいとして・・・あたしは？お皿1枚だけでしょうかがないわね・・・」

その日の晩御飯の時間ちゃぶ台の上にはお皿が1枚乗っているだけです。

に：「りおんちゃん、お茶碗で御飯食べるんじゃにゃいのか？」

り：「それがね、、、駅長さん。　お茶碗やらお皿を間違えて割っちゃったんです～～～」

に：「割っちゃったものは仕方ないにゃ。お皿じゃ、お味噌汁は無しかにゃ？」

り：「はい。。。。」

と、りおんちゃん、いつになく元気がありません。

に：「本社にファックスで『緊急』って書いて、ご飯用のお茶碗を送ってもらえばいいにゃ。」

り：「緊急ってどのくらい緊急になるんですか？」

に：「宅急便で送ってくれるから、2～3日で下の温泉宿に着くにゃ。　着いたら電話がくるから取りに行ってくればいいにゃ。」

り：「どのくらいかかるんですか？」

に：「山道で往復2日あれば行ってこれるにゃ。温泉宿に泊まってくればいいにゃ。」

り：「駅長さんも一緒に行ってくれないんですか？」

に：「人間の歩く道は疲れるにゃ。」

り：「疲れたら、あたしが抱いて行きますから、一緒に行ってくださいよ～。」

半分涙目になっている、りおんちゃん。　女の子の涙が無敵なんですか？

に：「わかったにゃ。　明日、ファックスを入れとけばいいにゃ。」

り：「はい。　わかりました～～～」

ご飯を食べ終わって片付けを始めるりおんちゃん。　今日はお皿が2枚なのであつという間に終わりです。　普段でもお茶碗が3つくらい増えるだけですが。。。。

り：「おやすみなさ～い。」

に：「あんまり気にしないほうがいいにゃ。　おやすみにゃ。」

り：「わかりました～～～」

に：「りおんちゃん、明日は朝から笑顔だにゃ。」

り：「おはようございま～す。 駅長さん！」

に：「おはようさん。 少しは元気になったかにゃ？」

り：「はい。 駅員は笑顔が大事ですよ。使う人はめったにいないけど、いつくるか分からないお客様のためにも笑顔で元気に。」

に：「そうだにゃ。 終わったことをくよくよと悩んでても何も解決しにゃいからにゃ。」

に：「大切なのは同じ間違いは繰り返さないことだにゃ。そうすれば、間違い一個分大きくなれるにゃ。」

り：「はい。 わかりました。駅長さんって絶対にあたしより年下なのに、大人なんですね。」

に：「生きた年数で大人になるわけじゃにゃいにゃ。それより朝ごはん、食べたいにゃ。」

り：「そうですね。すぐ準備しま～す。」

りおんちゃんは台所でことごとと何かを作り始めました。

昨晚、お茶碗を割ってちょっと落ち込んでいましたが、一晩でなんとかすっきりとしたようです。

り：「はい。できました～」

とりおんちゃんが持ってきたお盆にはネコまんまが二つ、お皿に載っているだけ。

に：「りおんちゃんも同じネコまんまにするのかにゃ？」

り：「だあってえ、お皿しかないんですもん。 いいですわ。これで。 いただきま～す。」

に：「あきらめが早いというか、たくましいというか・・・」

り：「駅長さん、なんですか？」

に：「にゃんでも、にゃいにゃ。」

今朝は二人仲良くネコまんまを食べて、お片付けも終わり、いよいよ仕事開始です。

り：「駅長さん、ファックスの専用の連絡書ってあるんですか？」

に：「そこの棚の引き出しに入ってるはずにゃ。」

り：「ここ？これ？棚だったんですか？」

に：「開けてみるといいにゃ。」

り：「え～と～お～～～ 事故報告書に会議報告書？ あっ！ありました！」

に：「そこの宛先に、本社備品部って書いて、緊急で手配をお願いいたします、って書いてから、下に必要なものをリストにして書いて・・・」

りおんちゃん、にゃん駅長に云われるままに書いていきます。

り：「え～と、お茶碗と味噌汁椀と丼と数は2つづつでいいかな？ 駅長さんもたまにはお椀とかお皿変えます？」

に：「そうだにゃ。 適当に書いておいて欲しいにゃ。」

り：「あとは・・・そうそう！ お箸とかスプーンとかも無いから書いてもいいですか？」

に：「欲しいだけ書いていいにゃ。 他にも食べたいものとかあったら書けば送ってくれるにゃ。」

り：「へ～そうなんですか？ 優遇されてるんですね。 この駅は。」

に：「高速列車の車掌さんと運転手さんが云ってたのを忘れたにゃ？ こんな駅。って。」

り：「そういえば、言われちゃいましたね。 そんなにひどくは無いんですけどね。」

に：「書きたいだけ書いたかにゃ？ ハンコ押すからこっちへくれにゃ。」

り：「えっ？ハンコ？」

に：「朱肉をこっちへ出すにゃ。」

りおんちゃん、言われるままに朱肉の蓋を開けて書き込んだファックス用紙をにゃん駅長の前に差し出しました。すると、にゃん駅長、ジブンの前足の肉球部分を朱肉に載せて、ファックスの下にポチっとおして・・・・・・・・

に：「これで、いいにゃ。」

り：「これでって、、、かわいい、ハンコ付きなんですね。」

に：「さ、ファックスを入れとけばいいにゃ。番号は電話帳に書いてあるにゃ。」

り：「は〜い。」

り：「駅長さ〜ん、ファックスで送れました〜 メールと違ってちょっと戸惑っちゃいましたけど〜」

に：「あとは、下の温泉宿から連絡がくるのを待つにゃ。」

こうしてお茶碗やら細々としたものを本社に送ってくれるように頼んだ一人と一匹は荷物がくるのを心待ちにしつつ、普段の仕事に戻ったのです。

ジリリリ〜ン、ジリリリ〜ン、ジリリリ〜ん！

普段、少なくともりおんちゃんに来てから、一回も鳴ったことが無かった、電話のベルがけたたましくなっています。

り：「あれ〜 なんでしょう？ 電話が鳴ってますね〜 ハイハイ。 ちょっと待ってください。」

と、言いながら電話の受話器をとります。

り：「はい。田舎駅です〜」

り：「ええ、はい。あっ、そうなんですか。 ちょっと、待って頂けますか？ 駅長さ〜ん。」

に：「ここにいるにゃ。」

り：「下の温泉宿からお電話で、本社からの荷物が届いているそうです。」

に：「早いほうじゃにゃいかにゃ。」

り：「で、いつ受け取りに来られますか？って、問い合わせの電話なんですけど。」

に：「明日にでも行くかにゃ？ 今日はもう遅いからにゃ。」

り：「分かりました。 明日行くんですね。」

り：「はい。お待たせしました。 ええ、明日受け取りに伺います。 はい。 宜しく御願います。」

そうやって受話器を置くりおんちゃん。

り：「駅長ささん、それではお待ちしております。って。」

に：「じゃ、りおんちゃん、出かける準備を始めないと、いけにゃいにゃ。」

り：「でも、荷物を取りに行くだけですよね？」

に：「人間が歩く道だと片道で6時間はかかるんにゃ。 明日は温泉宿にお泊りだにゃ。」

り：「そうでしたね。1泊2日の温泉旅行ですね。」

そういうと、ニコッと微笑んで駅舎の自分の部屋に戻って行きました。

に：「普通に山歩きに慣れた人で6時間って聞いているにゃ。 りおんちゃんの足だと10時間くらい考えたほうがいいのかにゃ？」

なんだか、かなりキツイ山歩きのようですね。 そんな山道を行きはいとしても帰りは荷物付きで歩いてこななければいけないという。 りおんちゃん、無事に往復できるんでしょうか？ とことことりおんちゃんの部屋に近づいていく、にゃん駅長。 なにか用事でもあるんでしょうか？

に：「りおんちゃん。 明日は1日がかりのハイキングだと思って、食事を作って持っていくんにゃ。」

りおんちゃん、部屋のドアも開けずに答えます。

り：「は〜〜〜い。了解で〜す。」

に：「それから、朝は早めにでるにゃ。」

り：「は〜〜〜い。」

そこまで云ってにゃん駅長はとことこと駅事務室を抜けて、ホームにでていきます。

そして、ホームのベンチで横になって日向ぼっこを始めました。

に：「明日は久しぶりに遠出になるにゃ。 大丈夫かにゃ〜〜〜」

そんな独り言をいいながら、ホームの両端を順番に見てみました。

に：「そもそも、こんな何も無いところに駅なんか作るから人間がくると大変なんにゃ。」

に：「りおんちゃんは楽しんで過ごしているみただけどにゃ。いままであんなに楽しそうにいる駅員も見たことがないにゃ。 たいていは、携帯電話が繋がらないの、インターネットができないの、飯が自炊は嫌だとかという理由で本社に転勤願いを出して1ヶ月でいなくなったにゃ。もっとも、いきなり山登りで脱出して行方不明になったとんでもない人間もいたにゃ。」

そんな独り言を呟きながら、日向ぼっこって良い待遇なんですね〜〜〜 にゃん駅長さんは。目をつぶって寝たのでしょうか。それともじっとしているだけなんでしょうか。 にゃん駅長さんの行動は不思議がおおいんですね。

に：「ネコだから人間には判らないことだらけで当たり前にゃ。」

そうこうしているうちに辺りは夕日で暗くなりかけています。

に：「そろそろ、夕飯の時間だにゃ。」

そう言ってベンチから駅舎の中へ、改札口を歩いていくにゃん駅長。

に：「あれ？ りおんちゃんはどこにいるんにゃ？まだ、明日の準備かにゃあ？」

いざ！麓の温泉旅館へ

に：「りおんちゃんはどこだにゃ？」

駅舎の中、駅の事務室やら待合室を適当に探していないの確かめると駅宿舎のりおんちゃんの部屋に向かいます。

肉球で戸をトントンと叩くと声をかけてみます。

に：「りおんちゃん、まだ準備中なのかにゃ？」

ドアを開けてりおんちゃんが顔を出して答えました。

り：「駅長さん、どうしましょう？ 持っていく服が決まらないんです〜〜〜」

に：「そんなに迷うようなことかにゃ？ 山道を歩くんだから長袖のシャツにジーンズでいいんじやにゃいかにゃ??？」

り：「基本的にはそうなんですけど〜〜〜 シャツの色とか柄とか気になっちゃって。」

に：「どうせ、途中で転んで泥だらけに・・・なったら同じだニャン。」

り：「そんなに酷い道なんですか？」

に：「考えてみれば判るにゃ。前に人が歩いたのは半年以上前だにゃ。」

り：「じゃ、、、草ボウボウ？枝とかも？そもそも道って判るんでしょうか？」

に：「それに坂だらけだからにゃ。滑って転んでは覚悟しにゃいとダメだにゃ。」

り：「そうなんです〜 判りました。これとこれにします。」

り：「ところで、駅長さん。何か用事だったんじやありません？」

に：「夕飯はまだかにゃ？と思って来てみたにゃ。」

り：「えっ??？ もうそんな時間なんですか？ あ——っ！ほんとだ！すぐに支度します。」

」

部屋からダッシュで台所に向かうりおんちゃん。台所ではご飯の支度を始めました。

に：「なんだかんだ云って、やっぱり女の子だにゃ。たかだか、2日の行程に着ていく服でたっぷり、3時間以上は迷ってたにゃ。」

台所ではりおんちゃんがお米を研いで、ご飯を炊く支度をしながら何やら考え込んでいます。

り：「えっとお、服はTシャツで長袖のものを持って、ウィンドブレーカーとか持って行って風にあたらないようにして・・・あとはお化粧道具とかズボン往復で2日だけだから、ジーンズが1本あればいいわね・・・」

に：「りおんちゃん、りおんちゃん。」

り：「えっ!? 何か？駅長さん？」

に：「お鍋からなんかふいてるにゃ。」

り：「えっ？あっ！ほんとだ！たいへ〜ん！」

どうも考え込んでお鍋からは煮物の汁が吹きこぼれ、ご飯はかなりオコゲが多くなってしまったようです。それでもなんとか支度を済ませて、夕飯のちゃぶ台を囲んでます。

り：「いただきま〜す。」

に：「やっと、夕飯にありつけたにゃ。でも、ちょっとコゲ臭いにゃ。」

り：「ごめんなさ〜い。お鍋もお釜も焦がしちゃいました〜あとで、ちゃんと洗っておきま

す～」

そうこう言いながら夕飯を食べる一人と一匹です。

に：「下の温泉宿に行くのは1年ぶりくらいだにゃ～」

り：「駅長さんもそんなに長い間行ってなかったんですか？」

に：「特に用事も無いからにゃ。」

り：「そうですね～ 駅に荷物って普通は列車がとおるからそれに載せてきますよね。ここは別世界ですけど。」

に：「自分に必要な荷物なんてないからにゃ。 荷物を送ってもらうのは駅員がいるときだけだにゃ。」

り：「さっ、ごちそうさまでした。 後片付けしたらお風呂に入って準備を済ませてから寝ますね。」

に；「早く寝た方がいいにゃ。山道はきついからに。 あと、明日の朝出発前に本社には、明日から不在です。ってファックスを入れといて欲しいにゃ。」

り：「はい。 わかりました。」

さてさて、、、朝もやがまださめやらぬ頃、田舎駅の煙突からはなにやら煙が立ち上っているようです。

り：「さ〜と、御版が炊けたらおにぎりでお弁当を作らなきゃいけないし。あれ？駅長さんはまだ寝てるのかしら？」

に：「寝てるわけがないにゃ。鼻唄歌ってるりおんちゃんの声は駅に響き渡ってるにゃ。」

り：「えっ？えっ？そうでした？ゴメンナサイ、起こしちゃいました？」

に：「まあ、いいにゃ。早起きをけしかけたのは自分だからにゃ。」

り：「ね、ね、駅長さん。おにぎりは1個でいいですか？それとも2個要ります？」

に：「夕方前には着くだろうから、1個あればいいにゃ。りおんちゃんは自分の分は何個だにゃ？」

り：「えっとね、山道？ケモノ道？を1日歩くんだから3個かな？」

に：「そのくらいの気力じゃにゃいと、山越えはできないにゃ。今夜は温泉宿でじっくりと休むといいにゃ。」

り：「でも、普段も温泉宿くらいの大きさのお風呂に温泉掛け流しを独り占めしてるんですよ？あんまり変わらないんじゃないですか？」

に：「今夜の夕飯と明日の朝ごはんの支度がいらぬぶん、少しは休めるにゃ。」

り：「そっか〜〜〜ご飯の支度も後片付けもいらぬんだ〜〜〜楽かも？これで山道が無ければ最高ですね。」

に：「それより朝ごはん？」

り：「はいはい。もうできてますよ〜」

に、り：「いただきま〜す。」

まだ外は暗い中二人は朝ごはんを食べて、これから山を降りて麓の温泉宿まで駅宛に届いた荷物を受け取りに行くのです。

そうこうしているうちに朝ごはんも終わり、外出の支度もできていよいよ出発？のようですが？

り：「あれ〜〜〜まだ外暗いですよ〜駅長さん。大丈夫ですか？」

に：「何が大丈夫なのかにゃ？」

り：「クマとかオオカミとかライオンとかでないんですか？」

に：「この辺の山に熊はいないし、オオカミはとっくの昔に日本国内で絶滅してるにゃ。ライオンって日本には野生はいないにゃ。」

り：「だって〜〜〜暗い中だと怖いんです〜んじゃあ・・・代わりにお化けとか妖怪とかでませんか？」

に：「お化けも妖怪もないにゃ。たまに散歩はしているみたいだけどにゃ。りおんちゃんには見えないにゃ。」

り：「変な人が出てきて襲ったりとかしませんよね〜〜〜」

に：「この辺に住んでる人はいないにゃ。さ、りおんちゃんは暗い中見えないだろうから、懐中電灯持って前を照らすにゃ。」

り：「は〜〜〜い。えっと、懐中電灯ってこれ重いですね？」

に：「なんでも、本格的な山岳装備品で山岳救助隊が持っているのと同じものらしいにゃ。」

り：「ふ～ん、電車の駅なのにこの近所って自然の脅威が満載なんですね。」

に：「それで、ちょっと右手の方を照らしてみると、草が少し低いところがあるのが判るかにゃ？あそこからが温泉宿へ通じる山道だにゃ。」

り：「かなりわかりづらいんですけど・・・あそこ？ですか？ 周りとの違いってなんですか～？」

に：「さ、早めに歩いていくにゃ。駅の鍵なんかかけないでいいにゃ。他に人もいにゃいし。」

り：「わかりました～～～」

そうって、やっと第一歩を開始しました。半年以上前に人が歩いてからこの道を歩いているのはにゃん駅長さんだけ、他に歩いている人はいません。 そんな道ですから草ボウボウで道以外と道の区別はほとんどありません。 これがりおんちゃん一人だったら10分も歩けば迷子になってしまうところですが、にゃん駅長が先導役で歩いているので、見失わなければ大丈夫。

り：「ほんとに草ボウボウで、下は土だから歩きづらいですね～」

に：「雨が降ってなくてよかったにゃ。雨降りだったら3日は延ばさないと無理だにゃ。」

り：「でも、雨が降ってなければ歩けるんじゃないですか？」

に：「雨のあとは道がぬかるんで滑りやすくてとてもりおんちゃんは歩けないにゃ。」

り：「そうですよね。いまでもかなり滑りやすいと思うんですけど、草の根に引っ掛かりがあって歩けるようなものですからね。」

に：「ペースを早めても疲れるだけだから、少し遅めに歩いた方がいいにゃ。どのみち着くのは夕方だにゃ。」

り：「そうですよね～ じゃ、ゆっくり歩きましょう～～～ 天気もいいことだし。 ハイキング気分？」

に：「ハイキングでも山登りでもいいにゃ。気をつけないと転びやすいにゃ。」

にゃん駅長とりおんちゃん、山道を歩いていきます。

温泉宿は田舎駅からはずっと下りになっているので、歩くのは比較的楽ですが足元に気をつけないとあっという間に、滑って転んでしまいます。

り：「きゃっ！」 云ってるそばからりおんちゃん、さっそく転んでしまいました。

り：「いった～～～ ちゃんと気をつけて歩いてたんだけどな～～～」

に：「下りで基本的に滑りやすいところだから、よっぽど気をつけても一回は転ぶらしいにゃ。」

り：「あ～あ～、ジーンズが泥で汚れちゃった。 温泉宿についたら洗濯させてもらわなきゃ。」

まだ出発して1時間も経ってない状況で1回目、たどり着くまでは何回転ぶんでしょうか？

まだ出発して1時間も経ってない状況で1回目、たどり着くまでは何回転ぶんでしょうか？

さて、にゃん駅長の話では一回は誰でも転ぶという田舎駅から下の温泉宿までの山道を下る、一匹と一人ですが、本当に一回で済むのでしょうか。

に：「りおんちゃん、なるべく陽が射し込んでいるところを選んで歩いた方がいいにゃ。 陽が

射し込んでいるところは乾いてて滑りにくいにゃ。」

り：「は〜い。 あっ！危ない危ない。 また転ぶところだったわ。」

に：「ジーンズはもう泥だらけだからこれから何回転んでも関係にゃいんじやにゃいか？」

り：「そうわいきませんよ〜 なるべく転ばないように歩かないと・・・」

そうやってとても山道を歩くような感じではなく、そろそろと歩いていきます。

そんな歩き方のせいかりおんちゃん、だいぶお疲れの様子です。

り：「疲れた〜〜〜 でも、駅を出てからまだ2時間経ってないんですね〜」

に：「このへんで一旦休憩にするかにゃ？ちょうどりおんちゃんが休めそうな石もあるしにゃ。」

り：「助かった〜〜〜 でも、山道を歩くのって疲れるんですね。 あたし、初めてなんですよ。 こんなに山を歩いたのって。」

そう言いながら汗をふきふき、水筒の水を飲んで周りの景色を見渡してみると、普段田舎駅ではみることができない沢の景色も伺うことができます。

り：「え〜〜〜こんなに近くに沢があって、お水が流れてますね〜 お魚とかいるんですか？」

に：「この沢はまず枯れることがないし、水も綺麗だから鮎とかいっぱいいるんだにゃ。」

り：「もしかして、駅長さんがお一人で駅の周りを歩く時ってこの辺にもきて沢でお魚をとったりしてるんですか？」

に：「ここはジブンの昼飯の狩りをする場所だからにゃ。」

り：「へ〜〜〜こんないところで狩りしてお魚とか取ってるんですね。 ついでに水浴びもですか？」

に：「ばれたにゃ。 ここの水で毛づくろいをすると毛がつやつやして気持ちいいんだにゃ。」

り：「それで、駅長さんの毛並みって凄いつやつやしてるんですね。 あたしも水浴びしたら肌が綺麗になるのかな？」

に：「沢をもう少しくだったところで沢の脇に温泉がでてるところがあるにゃ。 下の温泉宿より肌にいいらしいにゃ。」

り：「いいな〜入ってみたい〜〜〜」

に：「露店風呂で混浴らしいけど、大丈夫かにゃ？」

り：「でも、滅多に人が来ませんよね？」

に：「絶対こないってことじゃにゃいからにゃ。 ホントにたま〜に、猟師とか釣り人が入っているらしいにゃ。」

り：「混浴はちょっと嫌だなあ・・・でも、温泉の魅力もすてがたいですね。」

に：「温泉はまたにしてそろそろ歩かないと。」

り：「そうですね。 じゃあ、頑張って歩きましょう。」

少し休んで疲れが回復したりおんちゃん、掛け声は元気よくまた山道を下りだしました。

そして周囲の景色を眺めながら足元に気をつけながら、順調に山道を下っていきます。

最初の休みからさらに歩いてそろそろお昼の時間になりました。

り：「駅長さ〜ん、、、そろそろお昼にしませんか〜〜〜 疲れちゃった〜〜〜」

に：「もう少しだけ頑張るんだにゃ。」

り：「でも、、、足が前に進まないんです～～～」

にゃん駅長とりおんちゃん、午前の休みからさらに歩いて、お日様はもう頭の上、駅を出てから5時間近く歩きっぱなしの状況です。

普段駅では軽い掃除とか運動しかしてなかったりおんちゃんにはかなりキツイようです。

に：「あと少し、その角を曲がったところでお昼にするにゃ。」

り：「は～い、、、フウフウ……………」

に：「ホントにあと少しだからにゃ。 着いたにゃ。 そこに腰掛になる岩があるから腰掛けるといいにゃ。」

り：「ハアハア……………ここですね。 じゃあお弁当を開きましょうね。 ぜいぜい。」

に：「りおんちゃん、周りを見てみるといいにゃ。」

り：「えっ？周りって……………すご～い！ さっきよりもすごく良い眺めですね～ 疲れがふっとんじゃいそう！」

に：「ここが一番眺めがいいらしいにゃ。 前にいた駅員が云ってたにゃ。 ほらそこに湧き水もあるにゃ。」

にゃん駅長のいう方を見ると岩の間から綺麗な水が湧き出て岩の下のほうの沢に向かって一筋の流れを作っています。 ひとくち口に含んだりおんちゃん。

り：「おいし～い。いままで飲んだどんな水よりも美味しいです～～～」

に：「何でも、長寿、美人の水って伝説があるらしいにゃ。 どこまでホントかは知らないにゃ。」

り：「でも、水を飲んでみると体に力が湧いてくるような、なんだか体の心から浄化されていくような感じがしますね～ 持ってきた水筒のお茶じゃなくてこの水でおにぎり食べよっと。」
水筒のお茶はそのままに水筒についているカップのところで湧き水を汲んでおにぎりを頬張るとなんともいえないいい気分でお昼ごはんを食べることができました。

にゃん駅長もおにぎりを一個、湧き水をペロペロと舐めながらおにぎりを食べています。

り：「山道を歩いて疲れたところにこんな湧き水と景色があるなんて、田舎駅に配属にならなかつたら知らないことですよね～ ホントに田舎駅にきてよかった～～～」

に：「田舎駅だからあるものと田舎駅だから無いものがあることをちゃんとわかってその中で何をするかを考えるのも仕事のうちだにゃ。」

り：「あるものかないもの、ある時は無いと困るって思っても無くても困らないってあらためて感じる事ができただけでも凄いなって思います。」

そんなこんな田舎駅の話から田舎駅の周囲の話、そして田舎駅の存在意義の話まで二人の話は尽きないようです。

り：「ゆっくり休んだし、湧き水のおかげで疲れも取れたし、そろそろ出発します？」

に：「その前にその湧き水で顔を少し洗っていくと美人に磨きがかかるにゃ。」

り：「は～い、汗もかいたから少し顔を洗ってからにしま～す。」

にゃん駅長に云われるままに湧き水で顔の汗をぬぐうりおんちゃん。

こころなしかいままでよりもさらに肌の艶がかわってきたようにもみえます。

実はこの湧き水は美人の水として世界的に有名な場所なのですが、なにしろ山奥でケモノ道を

歩いてこないと辿り着けない場所にあるところから「幻の化粧水」としてしられた場所だったのです。にゃん駅長は普段の山の周囲の散歩でこの場所を知っていたのですが、いままで誰にも教えることはしませんでした。田舎駅が賑やかになるのが嫌いなようです。

まだ出発して1時間も経ってない状況で1回目、たどり着くまでは何回転ぶんでしょうか？

さて、にゃん駅長の話では一回は誰でも転ぶという田舎駅から下の温泉宿までの山道を下る、一匹と一人ですが、本当に一回で済むのでしょうか。

に：「りおんちゃん、なるべく陽が射し込んでいるところを選んで歩いた方がいいにゃ。 陽が射し込んでいるところは乾いてて滑りにくいにゃ。」

り：「は〜い。 あっ！危ない危ない。 また転ぶところだったわ。」

に：「ジーンズはもう泥だらけだからこれから何回転んでも関係にゃいんじやにゃいか？」

り：「そうわいきませんよ〜 なるべく転ばないように歩かないと・・・」

そういってとても山道を歩くような感じではなく、そろそろと歩いていきます。

そんな歩き方のせいかりおんちゃん、だいぶお疲れの様子です。

り：「疲れた〜〜〜 でも、駅を出てからまだ2時間経ってないんですね〜」

に：「このへんで一旦休憩にするかにゃ？ちょうどりおんちゃんが休めそうな石もあるしにゃ。」

り：「助かった〜〜〜 でも、山道を歩くのって疲れるんですね。 あたし、初めてなんですよ。 こんなに山を歩いたのって。」

そう言いながら汗をふきふき、水筒の水を飲んで周りの景色を見渡してみると、普段田舎駅ではみることができない沢の景色も伺うことができます。

り：「え〜〜〜こんなに近くに沢があって、お水が流れてますね〜 お魚とかいるんですか？」

に：「この沢はまず枯れることがないし、水も綺麗だから鮎とかいっぱいいるんだにゃ。」

り：「もしかして、駅長さんがお一人で駅の周りを歩く時ってこの辺にもきて沢でお魚をとったりしてるんですか？」

に：「ここはジブンの昼飯の狩りをする場所だからにゃ。」

り：「へ〜〜〜こんないいところで狩りしてお魚とか取ってるんですね。 ついでに水浴びもですか？」

に：「ばれたにゃ。 ここの水で毛づくろいをすると毛がつやつやして気持ちいいんだにゃ。」

り：「それで、駅長さんの毛並みって凄いつやつやしてるんですね。 あたしも水浴びしたら肌が綺麗になるのかな？」

に：「沢をもう少しくだったところで沢の脇に温泉がでていところがあるにゃ。 下の温泉宿より肌にいいらしいにゃ。」

り：「いいな〜入ってみたい〜〜〜」

に：「露店風呂で混浴らしいけど、大丈夫かにゃ？」

り：「でも、滅多に人が来ませんよね？」

に：「絶対こないってことじゃにゃいからにゃ。 ホントにたま〜に、猟師とか釣り人が入っているらしいにゃ。」

り：「混浴はちょっと嫌だなあ・・・でも、温泉の魅力もすてがたいですね。」

に：「温泉はまたにしてそろそろ歩かないと。」

り：「そうですね。 じゃあ、頑張って歩きましょう。」

少し休んで疲れが回復したりおんちゃん、掛け声は元気よくまた山道を下りだしました。そして周囲の景色を眺めながら足元に気をつけながら、順調に山道を下っていきます。最初の休みからさらに歩いてそろそろお昼の時間になりました。

り：「駅長さ〜ん、、、そろそろお昼にしませんか〜〜〜 疲れちゃった〜〜〜」

に：「もう少しだけ頑張るんだにや。」

り：「でも、、、足が前に進まないんです〜〜〜」

にゃん駅長とりおんちゃん、午前の休みからさらに歩いて、お日様はもう頭の上、駅を出てから5時間近く歩きっぱなしの状況です。

普段駅では軽い掃除とか運動しかしてなかったりおんちゃんにはかなりキツイようです。

に：「あと少し、その角を曲がったところでお昼にするにや。」

り：「は〜い、、、フウフウ……………」

に：「ホントにあと少しだからにや。 着いたにや。 そこに腰掛になる岩があるから腰掛けるといいにや。」

り：「ハアハア……………ここですね。 じゃあお弁当を開きましょうね。 ぜいぜい。」

に：「りおんちゃん、周りを見てみるといいにや。」

り：「えっ？周りって……………すご〜い！ さっきよりもすごく良い眺めですね〜 疲れがふっとんじゃいそう！」

に：「ここが一番眺めがいいらしいにや。 前にいた駅員が云ってたにや。 ほらそこに湧き水もあるにや。」

にゃん駅長のいう方を見ると岩の間から綺麗な水が湧き出て岩の下のほうの沢に向かって一筋の流れを作っています。 ひとくち口に含んだりおんちゃん。

り：「おいし〜い。いままで飲んだどんな水よりも美味しいです〜〜〜」

に：「何でも、長寿、美人の水って伝説があるらしいにや。 どこまでホントかは知らないにや。」

り：「でも、水を飲んでみると体に力が湧いてくるような、なんだか体の心から浄化されていくような感じがしますね〜 持ってきた水筒のお茶じゃなくてこの水でおにぎり食べよっと。」

水筒のお茶はそのままに水筒についているカップのところで湧き水を汲んでおにぎりを頬張るとなんともいえないいい気分でお昼ごはんを食べることができました。

にゃん駅長もおにぎりを一個、湧き水をペロペロと舐めながらおにぎりを食べています。

り：「山道を歩いて疲れたところにこんな湧き水と景色があるなんて、田舎駅に配属にならなかつたら知らないことですよね〜 ホントに田舎駅にきてよかった〜〜〜」

に：「田舎駅だからあるものと田舎駅だから無いものがあることをちゃんとわかってその中で何をするかを考えるのも仕事のうちだにや。」

り：「あるものかないもの、ある時は無いと困るって思っても無くても困らないってあらためて感じる事ができただけでも凄いなって思います。」

そんなこんな田舎駅の話から田舎駅の周囲の話、そして田舎駅の存在意義の話まで二人の話は尽きないようです。

り：「ゆっくり休んだし、湧き水のおかげで疲れも取れたし、そろそろ出発します？」

に：「その前にその湧き水で顔を少し洗っていくと美人に磨きがかかるにゃ。」

り：「は～い、汗もかいたから少し顔を洗ってからにしま～す。」

にゃん駅長に云われるままに湧き水で顔の汗をぬぐうりおんちゃん。

こころなしかいままでよりもさらに肌の艶がかわってきたようにもみえます。

実はここの湧き水は美人の水として世界的に有名な場所なのですが、なにしろ山奥でケモノ道を歩いてこないと辿り着けない場所にあるところから「幻の化粧水」としてしられた場所だったので。にゃん駅長は普段の山の周囲の散歩でこの場所を知っていたのですが、いままで誰にも教えることはしませんでした。田舎駅が賑やかになるのが嫌いなようです。

お昼ごはんも食べ終わり、ひと休みしたところで二人はまた山道を下り始めました。

り：「あと、どのくらいで温泉宿に着くんですか？」

に：「いままでの道でだいたいだけど、半分ちょっと足りないくらいだにゃ。」

り：「ということは・・・またおんなじくらい歩くんですね？ 大丈夫かしら？あたし。」

に：「お昼ごはん前と同じペースで歩いていければ夕方には温泉宿に着くにゃ。」

などと、相変わらず二人は話をしながら、にゃん駅長が先導役でりおんちゃんが後ろをついて歩いて感じて山道を下っていきます。

と、1時間ほど歩いたところでにゃん駅長が足を止めました。

後ろからついてきたりおんちゃん、同じように足を止めて屈んでにゃん駅長に声をかけます。

り：「駅長さん、どうしたんですか？」

に：「黙って。何かいるにゃ。」

り：「ええ～～～ お化け？妖怪？熊？・・・」

に：「離れていったにゃ。どうも、山の神様が散歩中だったみたいにゃ。出発にゃ。」

り：「えっ？えっ？えっ？ 山の神様？のおさんぽ？ つくづく不思議が多いところですね。」

にゃん駅長、普段からこの辺まで山の中を散歩？見回り？しているようで、ケモノ道となってしまう山道を歩いて何があってもあまり動じないようです。

り：「ねえねえ、駅長さん。前にここを歩いたのは何日くらい前なんですか？」

に：「3回前に朝ごはんを食べたあとにゃ。」

り：「3回目前ってことは3日前なんですか？ かなり頻繁に歩いてるんですね。」

に：「この道の近くはとおるけど、この道は歩かニヤイにゃ。」

り：「人間が歩く道だからですか？」

に：「道としては歩きにくいにゃ。ぬかるんでるし、高低差も大きいし。」

り：「駅長さんが歩き易いように歩いたらどうなるんですか？」

に：「りおんちゃんはついてこれにゃいにゃ。」

り：「ふ～～～ん、そうなんですか～～～」

に：「歩き易い、歩きにくい人は人それぞれだからにゃ。もっとも車とかバイクとか機械を使うとなると通れるところはもっと限定されるにゃ。」

り：「そういえば、田舎駅には車では行けないんですか？」

に：「車がこれるところなら、荷物をこうやって取りに行くこともないにゃ。」

り：「それもそうですね～」

あいかわらずケモノ道のような山道を歩いていく二人。

さらに下っていくと沢を渡る吊り橋にたどり着きました。

り：「えっ？えっ？えっ？この橋を渡るんですか？」

に：「この橋を渡らないと温泉宿には辿り着けないにや。」

り：「え～～～でも、ちょっと高いですよ？ 揺れたりしません？」

に：「自分が渡るときは揺れたことはないにや。」

り：「それは駅長さん、軽いからですよ～ ほら～揺れる～ やだ、こわ～い。」

に：「怖がってるだけじゃ渡れにやいにや。 先に行くにや。」

り：「やだ～～～駅長さ～ん、待ってくださいよ～。高いところだめなんです～」

りおんちゃんはどうも高所恐怖症のようです。

腰がひけた状態でなんとか吊り橋を吊っているロープをつかみながら、必死のようすで吊り橋の上で歩こうとして足をすすめますが、なかなか進みません。

にゃん駅長はそれを反対側でみているだけです。

に：「苦手なものは自分で克服しようとしなにかぎり、他人が何を云っても効かニヤいにや。」

そんなにゃん駅長の言葉が聞こえるはずもないのですが、りおんちゃんはなんとか自力で橋を渡ることができました。 顔は汗でびっしょりです。

り：「駅長さん、なんとか渡れました。ちょっと時間かかっちゃいましたけど。」

に：「時間がかかったのはどうでもいいにや。 それより歩けるかにや？ひと休みしてもいいにや。」

り：「ちょっと、汗かいちゃったから休みたいです～～～」

に：「橋のたもとだけど、大丈夫かにや？」

り：「なんか渡り始めたときより怖くない感じです。。。」

に：「それはよかったにや。 温泉宿まではホントにあと少しにや。 少しくらい休んでも大丈夫にや。」

り：「えっ？もっと遠いんじゃないんですか？駅長さん、1日かかるっておっしゃってましたよね？」

に：「いままで田舎駅と温泉宿を歩いた人達はたいていこの橋とか途中の露店風呂で時間がかかったらしいにや。」

り：「な～～～んだ～ で、あとどれくらいなんですか？」

に：「あと残り？いままでの半分くらいにや。」

り：「近いといってもかなりあるんですね……………」

に：「でも、道の勾配はゆるくなるしぬかるみも少ないからいままでより歩きやすいにや。」

り：「ふ～ん。 そうなんですか？ じゃ、出発しましょうか。」

に：「もう、休みは終わりでいいのかにや？」

り：「はい。あとは温泉宿まで一気にあるいちゃいましょう。」

に：「そのいきだにや。」

橋を渡る前までよりも少しは勾配がゆるくなった山道？ケモノ道を二人は歩いていきます。

途中木の根っ子やら飛び出している石やらにつまずきながらもなんとか転ぶのだけは避けたりおんちゃん。 やつとこさつとこ、遠くに建物らしきものが見えてきました。

り：「駅長さん、温泉宿ってあの建物ですか？」

に：「目線が低くて何も見えないにゃ」

り：「ごめんさい。 これならどうですか？」

にゃん駅長を抱え上げて自分の胸のあたりまで高くしてあげました。

そうすると、にゃん駅長、ちゃっかりとりおんちゃんの身体を登って肩の上に。 まるで、肩車しているようです。

り：「駅長さん、そんなところに登って・・・」

に：「このほうが少しは高いにゃ。 そうそう、あの建物だニャン。 じゃ、このまま歩くにゃ。

」

り：「駅長さんを肩に載せたままですか？」

に：「にゃにか？」

り：「なんでもないです・・・」

にゃん駅長を肩に載せたまま温泉宿までホンの少しでしたが、なんとか夕暮れ前にたどり着くことができました。温泉宿と云っても小じんまりとした建物で民宿と大して変わらない大きさのようです。 部屋も全部で8部屋ほど。

り：「ごめんくださ〜い。 田舎駅からきました〜」

宿の主人（以下、主人）：「いや〜〜〜これはこれはずいぶんと遠くからご苦労様です。 今夜はお泊りなんですよ？」

り：「ええ、そうです。 誰かから連絡でもあったんですか？」

主人：「田舎駅から荷物を取りにきた人は一晩お泊めするお約束を田舎電鉄さんとしているんですよ。」

り：「あ、そうなんですか。今夜は宜しく御願います。」

主人：「お泊りはお一人ですね。」

り：「あと、この駅長さんもなんですよ。」

主人：「大丈夫ですよ。お二人ご一緒のお部屋で宜しいですか？」

り：「そうしてください。 お世話になります。」

主人：「じゃ、履物はここで脱いで、お部屋にご案内します。」

りおんちゃん、玄関で履物を脱ぐとそのまま主人に案内されるまま部屋について行きます。

主人：「はい、お部屋はこの和室です。お風呂は田舎駅にはかないませんが、天然掛け流しで24時間ご利用頂けます。お食事は何時頃が宜しいですか？」

り：「えっと、7時頃で御願います。 でも、温泉が田舎駅にはかなわないって？それは？」

主人：「ここらへん一帯はどこを掘っても温泉が出るんですが、温泉の質は田舎駅の辺りが一番良質とされてるんです。 たぶん、お風呂に入って頂ければ分かります。」

人当たりのよい主人から温泉の説明と部屋の説明などを受けて主人は部屋から出て行きます。

り：「知らなかった・・・ 駅の温泉ってそんなに良いお湯だったんだ。 駅長さんは知っていました？」

そうにゃん駅長に言葉をかけてみましたが、にゃん駅長はそっぽを向いて答えようとはしません。

り：「へんね。 そういえば、宿に着いてから駅長さん何も話さないですよ？」

普段のにゃん駅長からは見られない何か知らないネコをみているような雰囲気さえただよってきます。

そして何も話さないにゃん駅長。

り：「そういえば、ご主人も駅長さんには一切話しかけようとはしなかったし・・・ 駅長さん！ どうなってるんですか？」

そう言っのにゃん駅長に話しかけても一切答える様子もなく、ただりおんちゃんをみて、にゃあ。 と答えるだけです。

話しかけても答えは分かりそうにないので、部屋をでてお風呂に入ってみることにしました。

り：「駅長さん、お風呂にいつきますね。」

話しても答えらないにゃん駅長ですが、いつもの癖でつい言葉をかけてしまいます。

婦人用の大浴場でお風呂を済ませた、りおんちゃん。

り：「ご主人がおっしゃってたとおりだわ。駅のお風呂のほうがなんとなくいい雰囲気のような気がするし、肌触りも違うみたい。」

それでも山道を下ってきた疲れを癒して、部屋に戻ってきました。

部屋に入ってみるとにゃん駅長はあいかわらず窓際でごろんと横になって寝ています。

り：「あたしも、少し寝ようかな。」

そうやって横になるとあっという間にかわいい寝息をたてて寝てしまいました。

り：「あれ、ここはどこかしら？ どっかの部屋のようにだけど？」

に：「りおんちゃん、ここは夢の中にゃ。」

り：「あっ！駅長さん。やっと話してくれましたね。え？でも夢の中って？」

に：「いまはりおんちゃんの夢の中にお邪魔してるんにゃ。ところで、私が人間の言葉を話すのは田舎駅の周りだけにゃん。だから、田舎駅の駅員しか話すことはしらにゃいんにゃ。」

り：「他の場所でも話をすれば便利なのに～」

に：「話をするのがばれるといろいろと面倒だにゃん。」

り：「わかりました。明日宿をでたら、またお話をして頂けるんですね？」

に：「くるときにりおんちゃんの肩に乗った場所までいったら話をするにゃ。」

り：「でも、、、、黙って女の子の夢にでてくるなんて・・・・駅長さんたらH！！！」

に：「夢にでただけでHでも夢の中でしか言えニヤいにゃ。」

りおんちゃん、そのまま夕ごはんの時間で部屋の戸を叩かれるまでスヤスヤと寝ておりました。

り：「すごーーい！海の物から山のものまでお料理がいっぱい！」

主人：「ここは山の麓ですし、海もそんなに遠くは無いので、両方の良い素材が簡単に手に入るんですよ。」

り：「いただきま～す。あ、おいし～い！」

主人：「そうやって頂けると料理したかいがあります。」

り：「ご主人、他にお客様はいらっしゃるんですか？」

主人：「田舎駅の駅員さんがこられるときは全館貸切という契約になってますので。」

り：「へー、会社がそこまで？ 不思議だわ。」

主人：「田舎駅とそのまわりの山全て田舎電鉄さんの持ち物で、私どもはそこを賃料無しで貸して頂いておりますので、そのぐらひはなんてことはありません。それよりも豊かな自然といい環境、いい温泉のちょうどいい感じを確保して載っている田舎電鉄さんには感謝しておりますので。」

主人：「おかげさまで、こちらの宿も毎日ほぼ満室なのですが、本日はお客様に無理をいって全て当館よりキャンセルさせて頂いております。しかし、こんな可愛いお嬢さんが田舎駅の駅員さんとは。」

入社してすぐに田舎駅に配属になって本社の話も田舎駅のこと何も判らずに過ごしてきたりお

んちゃんですが、宿の主人からいろんなことの話聞いて驚くことばかりです。

り：「じゃ、宅配便屋さんが来ないのは遠いからだけじゃないんですか？」

主人：「田舎電鉄さんの土地なので、基本的には駅員さん以外は山に入ることを禁止されているのですよ。本来なら私どもがお届けにあずかっても宜しいのですが、田舎電鉄さんからお断りされております。」

り：「ふーん、そうなんだ〜〜〜」

たくさんの料理を食べながら主人の話に聞き入ってしまうりおんちゃん。

り：「あ————、もうお腹いっぱい！」

主人：「よろしゅうございますか？」

り：「はい。もう入りません。ご馳走様でした。」

主人：「いえいえ、お粗末さまでした。それでは片付けさせていただきます。」

宿の主人からいろんな話を聞かされて、おいしい料理もいっぱい食べてかなり満足げなりおんちゃんです。

ほどなく、主人が部屋に布団をしきにきて部屋をでると、そのまま横になって寝てしまいました。

「りおんちゃん、りおんちゃん。」

りおんちゃん、夢の中の不思議な声で目を覚ましました。

目を開けると目の前にはにゃん駅長の顔。心配そうにりおんちゃんを覗きこんでいます。

そして、りおんちゃんが目覚めたのを見ると、りおんちゃんの鼻の頭をペロっと舐めました。

いままで、駅舎でもにゃん駅長に舐められたことが無かったりおんちゃん、怪訝そうな顔で起き上がりました。

り：「駅長さん、おはようございます。どうしたんですか？ あたしを舐めたりして？」

聞いても答えはありません。りおんちゃんが起き上がるとそのまま布団の横に移動して寝そべっています。

り：「そっか、ここはまだ温泉宿の中だから駅長さんと話ができないんだっけ。」

そして、すっかり起き上がると宿の浴衣姿のまま、またお風呂に行くことにしました。

り：「あ〜〜ほんとに温泉はいいな〜 学生時代もよく友達と温泉は行ったけど、この温泉も田舎駅の温泉も他の温泉よりぜつといい。」

温泉につかりながらそんな独り言をつぶやいてしまう、りおんちゃんです。

駅で話し相手がにゃん駅長だけなので、独り言が増えたんでしょうか？

り：「田舎駅の勤務はほとんど列車がこないことだけが、問題だけど、駅長さんも良い人、違うネコだったわ。駅舎の周りは景色も空気もいいし、なにより他の駅みたいに他人との煩わしい人付き合いも無いし。そう言えばお給料って払われてるのかしら？」

軽く朝のお風呂からあがって、部屋に戻ると既に布団は片付けられて、お部屋の真ん中には朝ごはんの支度が既にできていました。

そのご飯茶碗の下には1枚の紙切れが。手にとってみると宿の主人からでした。

り：「どれどれ、「えっと、おはようございます。朝ごはんの支度はできておりますので、ご自由にお召し上がりください。私は海辺の港に今夜の食材を仕入れにでかけます。お食事のあとはそのままにして頂いて結構です。お片付けは不要です。あと、御社からの荷物は玄関脇にだしてございます。」って。」

り：「そっか〜温泉宿も忙しいのね〜 じゃ、お言葉に甘えて頂きま〜す。」

昨晚の夕食も豪華でしたが、ここは朝ごはんもかなり豪華です。夕飯と比べても遜色がないくらいです。

り：「以前に友達と回った温泉宿のほとんどで夕食ってレベルよね〜」

朝ごはんにしてはかなり、相当豪華な御はんをお腹いっぱい食べて、宿を出る準備を始めました。

り：「え〜っと、荷物は玄関脇ってことだからでるときに持てばいいわね。部屋に忘れ物はなさそうだし、これで出発。駅長さん出発しますよ〜」

部屋の隅で寝ころんでいるにゃん駅長に声をかけると相変わらず黙ったまま、来たときと同じようにりおんちゃんの肩へ乗ります。

り：「ほんとに肩乗りネコですね。」

部屋を出て玄関にでてみると30センチ角くらいの荷物がりおんちゃんが履いてきたシューズの近くに置いてありました。そこにはもう一つ小さな荷物と紙切れが。

り：「何かしら？「田舎駅の可愛い駅員さんへ。」って書いてあるけど。あたしのこと？」

りおんちゃんが手にとってみるとこれも宿の主人からの手紙でした。

り：「どれどれ、「険しい山道と聞いておりますので、お茶とお弁当のおにぎりです。お持ちください。」って。でも、「可愛い駅員さん」は照れちゃう。」

荷物はりおんちゃんが持ちやすいように縛って持ち手がついていましたし、もってみるとそんなに重くはなさそうです。

り：「これなら持っても山道を歩いても駅に戻れそうだわ。出発！」

荷物を片手にリュックを背負って、肩にネコを載せた姿は何とも言えない感じです。

そして、玄関の戸をゆっくりと閉めると、そのまま宿にお辞儀をして昨日歩いてきた道へと足を進めていきます。

来たときは下りだったのですが、こんどはずっと上り道になります。無事にたどり着けるんでしょうか。

そして10分ほど歩くとそれまで肩に乗っていたにゃん駅長がひょいっと肩から道へ飛び降りました。

に：「ご苦労さんにゃ。ここからは自分で歩くにゃ。 先導しないとりおんちゃんが道に迷っちゃうにゃ。」

り：「駅長さん！ やっとお話してくれたんですね～ このまま話さないようになったらどうしようか？ って心配したんですよ～」

に：「昨日夢の中で話したとおりにゃ。さ、歩いていくにゃ。」

り：「は～い。 わかりました～」

途中すこしずつ休憩をとりながら歩いていくと昨日りおんちゃんが怖がってた吊り橋のところまでたどり着きました。

に：「りおんちゃん、今日は大丈夫かにゃ？」

り：「なんとなくなんですけど・・・今日はこのまま渡れそうな気がするんですよ～」

おや？昨日は吊り橋であんなに怖がったりおんちゃんですが、今日は少し違うようです。

り：「なんとなくなんですけど・・・ね。」

に：「んじゃ、渡るにゃ。」

にゃん駅長は足取りも軽く吊り橋を渡り始めます。 りおんちゃんも怖そうにはしてませんが、あとについて渡りはじめました。

に：「まだ、腰が少しひけてるにゃ。でも、昨日よりは凄い進歩だにゃ。」

り：「昨日よりは少しだけですけど、怖くないって感じですが、やっぱり怖いです～～～」

に：「可愛い駅員さん、頑張るんだにゃ。」

り：「駅長さ～ん、そんなところで茶化さないでくださいよ～」

とか冗談を言いながらそれを聞きながら、なんとか橋を渡りきりました。

その後も二人はいろいろと話しをしながら、山道を登っていきます。

り：「駅長さ～ん、このへんでひと休みしませ～ん。 疲れてきちゃった・・・」

に：「このペースなら夕方までには駅に着けそうだから休んでも大丈夫にゃ。」

り：「でも、山登りってなんか楽しいですね～ 運動にもなるし、美味しい水もあるし。沢も綺麗で眺めもいいし。」

に：「沢の水といえばここの湧き水も駅で使っている湧き水も元は同じ水源らしいからりおんちゃんも毎日飲んでるのと同じことだにゃ。」

り：「そういえば、元は同じ山の水ですよ～～～」

そんなことを話しながらひと休みした二人はさらに登って、昨日お昼ごはんを食べた場所まででできました。

に：「ここが昨日、お昼を食べた場所だにゃ。今日もここでお昼にするにゃ。」

り：「でも、時間は早くないですか？もう少し登ったところでもいいんじゃないですか？」

に：「ここ以外にりおんちゃんが腰掛けて食べれるところはにゃいにゃ。」

り：「そういえば、そうですね。 んじゃ、お昼にしましょうか。」

昨日と全く同じ場所で同じように岩の湧き水でおにぎりを食べる二人。 宿のご主人がにぎってくれたおにぎりの御味は？

り：「すご～い、梅干とおかか入りです～お米も少し塩味がついてて美味しいです～」

に：「私のは味がなしだからわからにゃいにゃ。ま、主人からみれば田舎駅のマスコットネコだからにゃ。」

り：「そのマスコットネコ駅長しかいない駅って思ってたんでしょうか？」

に：「いちおう、駅員が赴任するときには本社から温泉宿に連絡が入るらしいにゃ。 だからりおんちゃんのこと少しは知ってたはずにゃ。」

り：「ふ～ん、そうなんですか。。。 でも、宿のご主人が話してくれた田舎電鉄の話して知らなかったことばかりで、勉強になりました～」

に：「田舎電鉄と田舎駅のホンとのことを知ってる人はほとんどいにゃいらしいにゃ。」

り：「そうですね～ 周囲の山が全部会社の持ち物でとか、」

そんな田舎電鉄の話しをしながら、食事も終わり二人はまた山道を登り始めました。

勾配は急ですが、昨日よりは少ししっかりとした足取りで歩を進めるりおんちゃんと先導役のにゃん駅長。 お昼ごはんが終わってから登りだしてそろそろ3時間ほどです。

り：「もうかなり登りましたよね～～～ あとのどのくらいなのかな～」

に：「あと、1時間か2時間くらいにゃ。 それより少し急いだ方がいいにゃ。」

り：「どうしたんですか？急ぐって。」

に：「天気が怪しいにゃ。雨が降るかも。」

り：「傘なら持ってきましたけど？」

に：「雨をふせぐのは傘でいいにゃ。でも、土が濡れると滑り易くなるにゃ。」

り：「そうすると登るのに登りにくくなるってことですか？」

に：「そうだにゃ。」

そういうと二人は少しペースを上げて登り始めましたが、まもなく雨粒がポツポツと落ちてくるようになりました。 りおんちゃんは背中のリュックから傘を取り出して傘をさして歩いていきます。

り：「駅長さん、濡れちゃいますけど、いいんですか？あたしの肩に乗ってもいいんですよ。」

に：「先導役が肩に乗ってたら役に立たないにや。」

にゃん駅長はそのまま足を進めます。　りおんちゃんも滑らないように気をつけながらさらに登っていくと、ようやく駅舎の屋根が見えてきました。

り：「駅が見えました～ほんとにあと少しですね。」

に：「着くまでは油断禁物だにゃ。」

言ったか言わないかのうちに・・・・・・・・

り：「きゃ！いった～い。」

雨で濡れた土に足を滑らせて濡れた土の上に転んでしまいました。

に：「だから、言ったにゃ。」

り：「もう・・・シャツもジーンズも泥だらけです～～～」

に：「あと少しだからそのまま歩くにゃ。駅についたら最初にお風呂に入って身体を温めるにゃ。」

り：「そうします～～～」

泥だらけでも傘をさしながら歩いてなんとか駅舎にたどり着きました。

に：「お疲れさんだったにゃ。かなり汚れたけどにゃ。」

り：「えっと、荷物は台所に置いてっと。お風呂に入って洗わなきゃ。そうだ、駅長さんも一緒に入りませんか？雨で身体が濡れたのは一緒ですし。」

に：「ネコはお風呂に入る習慣はないにゃ。」

と、後退りしそうになったにゃん駅長を小脇に抱えると、そのままお風呂場にダッシュ。

脱衣所で着ているものを脱ぎ捨てると、そのままにゃん駅長を抱えてお風呂に入ってしまった。

り：「あ～～～やっぱり田舎駅のお風呂のほうがいい温泉だわ。ねっ、駅長さん。」

に：「無理やり人をお風呂に入れるもんじゃないにゃ。私は宿の温泉は入ってないからしらにゃいにゃ。」

り：「駅長さんと一緒にお風呂に入るのも初めてですし～あと、お身体洗いますね？」

に：「人間と同じ石鹸は肌に悪いにゃ。ここの温泉製の石鹸がどっかにあるからそれならいいにゃ。」

り：「ここの温泉製って温泉の成分でできた石鹸ですか？」

に：「そうだにゃ。でも、りおんちゃんって胸は小さいんだにゃ。」

り：「駅長さんってば、何を言い出すんですか～～～小さいのはあたしの一番の悩みなのに・・・もう・・・H！」

に：「一緒に入ろうって無理やり抱えてきたのはりおんちゃんだにゃ。一緒に入ればみえちゃうにゃ。」

り：「そうなんですけどね～まさか、駅長さんから言われるとは思ってなかったから・・・」
一匹と一人の入浴タイムも終わりお風呂からでてみると、外からは激しい雨音が聞こえてきます。

り：「けっこう降ってますね～大丈夫でしょうか？山崩れとかないですか？」

に：「この周りの山は木もいっぱい生えてるし、下草もあるから崩れることはにゃい。」

り：「ふ～ん、そうだ。荷物確認しなきゃ。」

温泉宿で受け取った荷物を開けて中身を確認するりおんちゃん。頼んであった新しいお茶碗とお汁椀、お皿が何枚かと新しいお箸も入っていました。

り：「頼んだお茶碗の他にも入ってますね〜〜〜 そろそろ晩御飯の支度をしますね。」
いつもとおりエプロンをつけてご飯の支度をするりおんちゃん、外は雨ですが田舎駅にようやくと普段が戻ってきたようです。

お米を研いで、野菜、肉類ある時は魚を手際よく用意していきりおんちゃん。

今日は鼻唄まじりでお料理をしています。そして、ご飯が炊ける頃にはお味噌汁の準備までおわって、にゃん駅長の新しいお皿にご飯を盛ってから焼いたお魚を載せて、その上から温めたお味噌汁をかけます。

自分の分はというと、お茶碗にご飯をよそって、お味噌汁をお椀に。そして、今日はお野菜とお肉の炒め物でしょうか？ おかずはいつもの通り一品のようです。

り：「駅長さん、準備ができました〜 食べましょ。」

に、り：「い〜ただき〜ま〜す。」

り：「昨日の夕飯も豪華で美味しかったけど、多過ぎだわ。年中あれじゃふとっちゃう。やっぱりこの一汁一菜が一番いいわ。」

に：「あれはあれで、たまにだからいいんにゃ。毎日じゃ飽きるにゃ。」

り：「そうですよね。あたしはこれで十分ですもん。」

普段通りににゃん駅長はネコまんま、りおんちゃんは一汁一菜がやっぱり一番いいようです。食べていたりおんちゃんですが、ふと考え込むようにして箸が止まります。

に：「どうしたんだにゃ？」

り：「あの、2つ気になることがあって・・・ ひとつは今朝駅長さんが起こしてくれたときにあたしの鼻を舐めましたよね？なぜですか？ それと、ここへ配属されてからのあたしのお給料ってどうなってるんですか？ご存知ありません？」

に：「そのことかにゃ。今朝はなんとなくうなされてるような感じがしたけど、起きたら大丈夫そうだったんでつい舐めてしまったんにゃ。気を悪くしたんなら謝るにゃ。」

り：「気を悪くするなんてとんでもないです〜 なんかすごく嬉しかったんです。」

に：「ならよかったにゃ。お給料は前の駅員が本社に電話して聞いてたことがあるにゃ。なんでも本社経理部保管で田舎駅から別の駅に配置転換のときにまとめて振り込まれるらしいにゃ。それまでは必要なものは全部田舎駅の経費で購入するといいにゃ。何か欲しいものとか買いたいものがあればの話しだにゃ。」

り：「全額？本社経理部保管ってことは全額貯金しているようなものですよ？でも、明細とかも全然こないからいくらだかも判らないんですけど・・・」

に：「そんなに心配はいらにゃいらしいにゃ。田舎駅勤務特別手当でかなり高いらしいにゃ。前に居た駅員のことには知っているかにゃ？」

り：「前に駅長さんから聞きました。半年で自分で山を降りて、田舎駅勤務を辞めたって・・・」

に：「噂で聞いただけだからホンとかどうかはわからにゃいけどにゃ。なんでもかなりいい車を新車で全額現金で買ったらしいにゃ。」

り：「新車を全額現金払い？ですか？ちょっとした車でも200万円以上かかりますよ？それも

かなりいい車？ですか？」

に：「その前にいた駅員は1年で中古でもマンションを買ったらしいにゃ。」

り：「1年でマンション？それって1000万円近くってことですよ？」

に：「人間が住むところがいくらだかはしらにゃいにゃ。ま、それくらい貰えるらしいにゃ。」

り：「じゃあ、ここへ勤務する人の希望が多くて困りそうなものですけど・・・」

に：「この田舎駅での暮らしぶりが寂しすぎて嫌らしいにゃ。毎日毎日ネコと遊んで、来るか来ないか判らない列車と乗客のために駅を守る、って仕事。」

り：「ふ～～～ん、そうなんですか。あたしはこの仕事が好きですけどね～ そりゃ、たまには携帯電話で昔の友達と話したいとかありますけど。面白い駅長さんもいるし、話し相手にもなってくれるし。自然がいっぱい、温泉も入り放題だし。」

り：「そりゃあ、駅員なのに列車が来ない駅ってのが相当不思議ですけどね。」

に：「駅だから列車がくるのが当たり前だとすると、列車がこないところは駅ではないにゃ。」

り：「そうなりますよね。そうするとここは駅じゃない。でも1年に一回くらいは来る・・・それで立派に駅なんじゃないですか？」

に：「そこのところをどれだけ柔軟に考えられるかだにゃ。固定観念で決めつけるのは自分の人生を狭くしているにゃ。」

り：「そうですね。わかりました。さて、食べ終わったし、ごちそうさまでした。お片づけしますね。」

に：「自分は寝るにゃ。長旅で疲れたにゃ。」

り：「は～い。お休みなさ～い。」

にゃん駅長は横になり、りおんちゃんはお茶碗とお皿を台所に持って行って洗い物を始めました。

洗い物が終わると往復で汚れた服の洗濯にかかります。ここ田舎駅では洗濯機はありますが、かなりの年代物。洗濯物を放り込んで終わりってわけにはいきません。それに乾燥機は無いので、今夜みたいな雨の日には駅舎の中の自分の部屋に干すことになります。

それでも、なんとか洗濯も終わりやっとなんかの仕事が終わります。

り：「田舎駅の存在と周りの山々、そして温泉宿。昨日今日でずいぶんといろんな事を教わった気がする。」

雨音を眠歌にりおんちゃんも横になりました。。。

また、普段の1日の始まり

さて、昨日一昨日の温泉宿往復で疲れた、にゃん駅長とりおんちゃんも寝静まり、ほどなく朝を迎えました。

昨日の雨は降り止むこと無く未だにシトシトと降って、山を駅を濡らしています。

そんな中、眼をさましたりおんちゃんですが、雨の音はりおんちゃんの部屋にも届いています。

り：「なんだ～雨はまだ降っているのね。これじゃ、今日は何をすればいいのかしら。」

そんな独り言を呟きながら、寝間着のまま顔を洗って支度を整えていきます。

り：「あれ？なにか肌の感じがいつもよりいい感じかも？ 一昨日の岩の湧き水のせいかしら？」

り：「でも、そんなに早く効果がでるわけではないか。 気のせいね。きっと。」

に：「おはようにゃ。」

り：「駅長さん、おはようございます。駅長さんも顔を洗いにきたんですか？」

に：「ネコは普通水で顔は洗わないにゃ。 普通は手であらうんにゃ。」

り：「そうですよね。なんか駅長さんと話していると、駅長さんがネコだってことは忘れてしまっそうです。」

に：「それだけ変わったネコにゃ。」 ちょっと、ふくれてます？

り：「いえ、そんな変な意味じゃないですよ～ とってもいい意味です～」 慌ててフォロー？

に：「別に気にはしてないにゃ。」

り：「そういえば、何か用事があったんじゃないですか？」

に：「別に・・・ ただ、起きたら洗面所で音がするんで来てみただけにゃ。」

り：「朝ごはんならもうちょっと待ってくださいね。お顔が終わったらすぐに支度しますから。」

に：「そうしてくれにゃ。 ところで、今日も朝から雨だにゃ。」

り：「そうなんですよ～ 今日は何にしましょうか？」

に：「この雨じゃホームの掃除もできないにゃ。 まあ、ちょうどいい機会だから倉庫の片付けでもするかにゃ？」

り：「倉庫？の片付けですか？ 倉庫なんてありましたっけ？」

に：「駅舎からホームを都会方面に歩いていくとホームの端に建物があるにゃ。」

り：「えええ？ホームの端っこのところのあのボロ小屋がですか？」

に：「なんだと思ってたんにゃ？」

り：「何かな？とは思ってたんですけど、あまり気にしないようにしてたんです～～～気味悪いし～」

に：「別に変なものはでないし、何も無いにゃ。 中にあるのは駅で使う備品とか道具とかだにゃ。」

ここもとりあえずは駅なので備品とか工具は常備されているようです。

ただ、それがいつ日の目をみて役に立つかだけは誰も知らないようですが。

に：「とにかく、ボロ小屋でもなんでも、駅と列車の運行に必要なものが保管してあるんにゃ。」

整理整頓は大事だにゃ。」

り：「は～～い～～」

りおんちゃはいつになく気の無い返事です。それもそのはず、ホームの端にあるというその倉庫は見た目が本当にオンボロなので、りおんちゃんはずっと幽霊がでるんじゃないかと疑っていた建物なのです。だからなるべくホームの掃除のときにも近寄らないようにしてたくらいなんです。

さてさて、いつもの通りの朝ごはんを済ませて、後片付けも終わったりおんちゃんですが、今日はなんだか浮かない顔をしています。よっぽど、倉庫に入るのが嫌なんでしょうか？

り：「あ～あ～～、とうとうあの幽霊小屋に入らなきゃいけないのね・・・ やだな～～」

おやおや、りおんちゃんは倉庫に別名までつけて呼んでいたようですね～～

に：「りおんちゃん、行くにゃ。」

り：「は～～い～～ どうしても行かなきゃダメですか？」

に：「可愛い駅員さんしてもダメにゃ。鍵はその改札の鍵の隣だにゃ。」

特別特急に合わせて作られたホームなので、駅の改札を出たところからホームの端の倉庫は雨で霞んでしまって、よく見ることもできません。

改札のところで、りおんちゃんが傘をさします。駅の用事で使う傘なので普通のよりも少し大きめにできています。そして雨に濡れないようににゃん駅長がりおんちゃんの肩に載ってからりおんちゃん、傘をさしてホームの端の倉庫を目指して歩いていきます。

り：「ほんとにお化けとかでませんよね～～」

に：「ただ、長期間使ってなかつただけの倉庫だから心配はいらにゃいにゃ。」

そうこうするうちにりおんちゃん、倉庫の扉の前に着きました。鍵を鍵穴に差し込んで回します。

当然のことですが、意外にも素直に鍵が回り扉を開けることができそうです。

り：「ボロ小屋の割には錆びついているとかではないんですね。」

に：「そういうふうに考えてたんにゃら、かなり驚くにゃ。」

り：「え？なににですか？」

いいながら、扉を開けるりおんちゃんです。扉もスムーズに開けることができました。

そして、扉を開けて中に入り灯りのスイッチを探そうとしました、どこにも何もスイッチらしきものが見当たりません。

り：「へんね？ 灯りのスイッチが無いわ。」

に：「そのままあと一歩踏み出すんだにゃ。」

り：「でも、暗くて何も見えないんですけど・・・」

に：「りおんちゃんが入れば灯りが自動で点灯するにゃ。」

そう云われてりおんちゃん、傘の雫をはらってから、一歩中に入ってみました。

とたん、入った扉は自動で閉まる音がして中が暗くなる瞬間に合わせたように、天井のライトが点灯しました。そして、倉庫の中、全体を見渡せるようにモニターまで付いています。

り：「えっ？うそっ？なにこれ？」

に：「ここの倉庫のシステムはほとんどフルオートにゃ。正面のモニターで倉庫の内部は全部見れるし、在庫はモニター脇のボタン操作で伝票としてでてくるし、使った部材とか備品とかはいちいち記入しなくても、半年に一度の棚卸のときに在庫一覧って伝票を出力して本社にファックスを入れたら終だにゃ。」

り：「こんな凄いシステムが揃ってるんなら何も倉庫の整理っていらんじゃ？ありません？」

に：「駅の運行に必要なものはそうやって在庫整理しているんにゃ。でも、運行に特に必要がない物は対象外なんにゃから人間がかぞえにゃいとにゃ。」

り：「必要の無いものって??? たとえば？」

に：「売店のお土産に、缶ジュースとかは駅の運行に必要無いものにゃから数えないとダメにゃ。」

り：「あ、そっち方向のもんですね〜〜 判りました〜」

ボロな外観とはまったくちがった最新のシステムで駅と列車の運行に必要なものを管理している倉庫とは、それに対して無くても運行に支障の無いものはシステムに載せるのさえ嫌がったかのようになっています。それでも気を取り直した、りおんちゃん、売店での販売物がこんなところの倉庫にあったということで、在庫の数を数えだしました。

り：「え〜と、ひとつ、ふたつ、・・・・・・・・・・・・・・・・」

に：「冷蔵庫と冷凍庫もあるから頑張るんにゃ。」

り：「えっ？ここだけじゃなくて、冷蔵庫に冷凍庫までやるんですか？」

に：「運行に支障はなくても無いからまったく困らないわけではにゃいにゃ。防寒服なら入り口にかかっているにゃ。」

「は〜〜い。」と返事をして在庫の数を勘定していきます。

さてさて、倉庫で駅売店とか運行には対して関係の無いお客様向けの時刻表など、食べ物、飲み物、書類などの在庫確認をしているりおんちゃん。

り：「えっと・・・これは、、こっちで・・・元々の在庫はいくつあったのかしら？」

などなど、独り言を呟きながら帳簿と数の確認をしていきます。

り：「これで、、これは終わり、っと。 えっと、次は、これかな？ これ箱に入ったままだけど、何かしら？」

に：「自分のご飯缶にゃ？」

り：「えっ？キャットフード??？」

と、いいながらカートンの蓋を開けるりおんちゃん。

り：「ホントに駅長さんのご飯缶です～ でも、なんで開いてないんですか？」

に：「最初に食べたときにまずくて、そのあと出されても口をつけにゃいから、減らないんだにゃ。」

り：「でも、最初に食べたときの残りってあるんじゃないんですか？」

に：「駅舎の台所に3缶くらいあるじゃにゃいかにゃ？」

り：「へ～～～そうなんですか？ じゃ、こんど探してみましようか？」

に：「見つかっても食べないにゃ。」

り：「嫌いなものを食べて欲しいとは云いませんから、ご安心下さい。ちょっと見てみただけです。」

に：「自分のご飯は在庫を数えるだけで、次のものにするにゃ。」

にゃん駅長、よっぽどキャットフードが嫌いなのか在庫確認はいい加減にして欲しいようですね。

に：「なんで世間の普通のネコはキャットフードなんかで満足してるんだにゃ・・・」

り：「そんなに嫌いなんですか？ キャットフードが・・・」

に：「どれだけ不味いか、毎日食べてみればわかるにゃ。3日で飽きてみたくなくなるにゃ。」

にゃん駅長、珍しく吐き捨てるように云って横を向いてしまいました。

り：「まあ、まあ、駅長さんにしては珍しく不機嫌になったりして・・・。 かわいい～～～」

りおんちゃんに半分からかわれてしまってますが、相変わらず期限はなおりそうにはありません。

そのままそっぽを向いて寝そべってしまいました。

そんなにゃん駅長にかまっても片付けが終わらないと考えたりおんちゃんは、また帳簿とのにらめっこを始めます。

り：「え～っと、帳簿のここまではOKだわ。 次はっと・・・ あ～～～冷蔵庫のなか？」

腐るものは基本的に田舎駅には置いてありませんが、念のためということで食品関係は冷蔵庫と冷凍庫に保管してあるようです。 ため息をついてふと時計をみるとそろそろお昼ごはんの時間です。

り：「駅長さん、そろそろお昼ごはんの支度をしないと。」

に：「どこまで終わったんだにゃ？」

り：「普通にあるものの帳簿確認は終わりました。 残りのものは冷蔵庫と冷凍庫の中みたい

です。」

に：「ちょうどキリがいいところで終わらしたほうがいいにゃ。　続きはお昼ごはんのあとだにゃ。」

にゃん駅長とりおんちゃん、そこまでの確認で一旦終りにして、続きは午後にするようです。

り：「えっと、ドアはここですけど・・・これどうやって開けるんですか？」

に：「しらにゃいにゃ。」

り：「知らないって・・・ドアハンドルも何も無いですよ？」

に：「ドアの前に立てば開くんにゃ？　全自動だからにゃ。」

りおんちゃん、にゃん駅長に促されるままにドアの前に進んでみます。　するとドアの面に画面が現れました。　続いて自動音声で画面上のボタンをタッチするように指示がでます。

り：「え～と、倉庫システムのメインパネルでドアの開閉を選んで、開けるって指示をすると、ドアが開く。らしいですね。」

そこでりおんちゃんはメインシステムのパネルを操作してみました。

そこには確かにドアの開閉という項目もあります。　そして隣には顔認識という項目まであります。

そこで、システムに自分の顔を登録してみることにしました。

り：「ここで、このボタンを押して、カメラ画面を見つめて・・・撮影された写真で登録を押すと。あら？管理者承認？でも、ここにはあたししかいないし・・・」

に：「りおんちゃん、それは自分だにゃ。」

そう言って操作パネルにヒョいとジャンプしてのると指紋認証パネルに自分の肉球を押し付けます。

するとシステム画面に「りおん駅員登録完了」の文字がでてきました。

り：「すご～い！駅長さんの指紋も登録されてるんですね？」

に：「ここで顔認証の登録をしておけば次はドアを開け閉めするのに鍵はいらにゃいにゃ。認証された人がドアの前に立つだけで開くし出ていけば自動でロックされるにゃ。」

ここまで高度なシステムが必要な駅かどうかは後に判るとしてなにやら凄い進んだシステムになっているようです。　言われた通りりおんちゃんがドアの前に立つとドアは静かに開いてにゃん駅長とドアを出るとそのままドアは自動で閉まり、ロックが掛かる音が静かにしました。

り：「じゃあ、次に来るときはもう鍵は要らないんですか？」

に：「万が一システムが止まったときに緊急解除するために持ってきたほうがいいにゃ。」

り：「ふ～ん、そういうもんなんですか・・・」

ドアの前に立ってみると、ドアは静かな音をたてて開きました。同時に部屋の灯りが暗くなります。

にゃん駅長を肩に載せたりおんちゃんが降り続けている雨のために傘を開いて、ドアの外にでます。

りおんちゃんが一步外に踏み出すと後ろでドアが開くときと同じように、静かに閉まりました。

り：「かなり、よくできているみたい。でも、なんでこんなシステムが必要だったのかしら。」

に：「普段は誰もいないのを考えたらなるべく完璧なシステムが必要と考えたんにゃ？」

り：「そうね～ ほとんど人がいないことが多かったんですものね。」

妙な理屈になんとか納得したりおんちゃん。

そのまま駅舎に戻って台所に入ります。そう、お昼ごはんの準備を始めるためです。

おや、台所の棚のあちこちを開けては中のものをだしては、一つ一つの物を確認しだしたのです。

に：「りおんちゃん、台所は棚卸しなくても大丈夫にゃ。」

にゃん駅長の言葉が聞こえているのかいないのか、棚の中を確認しています。

り：「あああつたあ！ 痛い！」

何かを見つけて棚の中に頭を突っ込んだまま立とうとして、棚に頭をぶつけたようです。

に：「にゃにがあつたんだにゃ？」

り：「いた～い・・・ これです～。」

と云ってぶつけたところをさすりながら出てきたりおんちゃんが手にしていたのは、キャットフードの缶でした。

に：「そんなものは見つけにゃくてもいいにゃ。」

り：「でも・・・気になってしょうがなかったんです～」

に：「まあ、私の食事にださなければいいにゃ。」

り：「ホントに残ってたんですね～ もったいないな～」

に：「そんなにもったいないなら、りおんちゃんが食べたらいにゃ。」

り：「でも、人間が食べても害は無いんですかね？ 摂取カロリーとか・・・」

に：「そんなことはしらにゃいにゃ。」

にゃん駅長に云われてちょっと名残惜しそうにキャットフード缶を見つめて考えてたりおんちゃん、本当に食べる気なんでしょうか。

り：「もったいないけど、諦めて素直に食事の支度を始めま～す。」

に：「そのほうがいいにゃ。」

その後は普段食べているようにご飯とお味噌汁、おかずを一品とにゃん駅長の為にネコまんまを用意したりおんちゃんです。

に、り：「いただきま～す。」

り：「でも、やっぱりもったいないですよ～ 何か有意義に使うことはできないかしら。」

に：「そんなに気になるんなら、山の動物にでも出せばいいにゃ。リス、ネズミ、なんでもくるにゃ。」

り：「そんなに簡単にくるんですか？」

に：「キャットフードを準備したら私がみんなを呼べばいいにゃ。」

り：「あ、そういえばそうですね～　じゃあ、台所に残っている缶は全部お山のみなさんに差し上げていいんですか？」

に：「勝手にすればいいにゃ。」

おやおや、なんだか話しが変な方向に行っているみたいですね。

大丈夫なんでしょうか。

さてさて、今日の仕事もほとんど終り、りおんちゃんは夕飯の支度をしています。

り：『ふふ～ん、ふふふ～ん。』

に：『なんかイイコトでもあったんかにゃ？』

り：『えっ？なんでですか？』

に：『こころなしか浮かれているように見えるし、夕飯の支度をしながら鼻唄なんて初めて見るにゃ。』

に：『それに・・・・・・・・』

そうって、普段は滅多にのぼらない台所の上の棚にヒョイと飛んだにゃん駅長。

台所を覗きこんでみると、そこにはにゃん駅長が大っきらいなキャットフードが3缶も置いてあります。

に：『りおんちゃ、これはなんだにゃ？』

り：『駅長さんが食べないっておっしゃったキャットフードの缶ですけど？』

に：『なんでこんなところにあるんだにゃ？』

り：『駅長さんが山のみなさんにあげていいっておっしゃるから開けてあげようかと思ったんですけど？』

に：『ジブンの皿に載ってきたらどうしようかと思ったにゃ。』

り：「そんなことはしませんから、ご安心くださいな。』

に：「たまに茶目っ気たっぷりだからにゃ。りおんちゃんは。」

り：「食べ物ではしませんから。それより山のみなさんと呼んで頂けませんか？あとは缶を開けて3つのお皿にあけるだけですから。」

に：「判ったにゃ。」

そういうとにゃん駅長は少しくぐもった感じで、にゃあにゃあと鳴き始めました。

そして、周囲を伺うふうにしています。りおんちゃんは缶を開けて、お皿に中身を入れていきます。

に：「駅の回りのネズミとりす、うさぎが集まってきたにゃ。これいじょうだと足りなくなるかも知れないにゃ。」

り：「足りないと、けんかになっちゃいますね。」

に：「みんなけんかするような仲間じゃにゃいにゃ。ここの周囲の山は食べ物も豊富だからにゃ。ちょっと変わったもんがあるからにゃ。と呼んだだけにゃ。」

り：「確かに自然だけは満載な山ですしね。ケンカにならなければいいですよ。じゃ、駅の軒下に置いてきますね。」

りおんちゃんはお皿を駅の軒下に置いて戻ってきました。外からはキャットフードをかじっているカリカリと音が聞こえます。

り：「みなさん美味しそうに食べていらっしゃいます？」

に：「確かに味はいいかもしれないが、不健康な材料がいっぱい入っているから、全部は食べられないってみんな云ってるにゃ。」

り：「ふ～ん、そんなものなんですか・・・ やっぱり、みなさんのおくちにも合わないんですね。。。」

に：「ジブンが食べないのを山の友人たちにあげても同じ意見だにゃ。」

り：「そうですね。 やっぱり、倉庫のカートンは永遠に開くことは無いんですね。」

に：「ジブンが辞めて、次の駅長が同じくネコだったら食べるかもしれないにゃ。」

り：「駅長さん、あたしがいる限りは辞めないでくださいねっ。 駅長さん以外のネコさんじゃ寂しいです〜」

に：「誰も辞めるとは云って無いにゃ。 当分はいることにするからにゃ。」

り：「アタシもいつまでここ田舎駅に勤務なのか分からないんですけどね・・・」

に：「本社から何も云ってこないから当分はこの勤務だにゃ。」

り：「何か予兆みたいなのはありますか？」

に：「転勤のときには本社からファックスが入るにゃ。 いま入らないってことはあと、少なくとも1年は入らないにゃ。 次の配属評価の時期はもう過ぎてるからにゃ。」

り：「よかった〜 まだまだ、ここに勤務できるんですね。 んじゃ、アタシ達もご飯にしましょ。」

そういうとすっかり支度が終わったご飯を居間のちゃぶ台に並べて一人と一匹は夕ごはんを食べ始めます。

そういえば、倉庫のお片付けはもう終わったんでしたっけ？ 作者の都合ってやつで終りでもいいですよ。

いつもとおりのネコまんまと1汁1菜でちゃぶ台を食べる一人と一匹。

にゃん駅長は黙ってモクモクとネコまんまを食べています。

リオンちゃんのご飯と味噌汁、一品のおかずを交互に箸でつまみながら、食べています。

食べ終わるとリオンちゃんはお片づけ、にゃん駅長はというとゴロンと横になって、じっとリオンちゃんのを目で追います。

一人と一匹分の鍋、釜、食器なんて大したことは無いので、リオンちゃんはあっという間に台所での用事を済ませて、部屋に戻ります。

り：「んじゃ、あとはお風呂にはいりますね。」

に：「お疲れにゃ。今日は棚卸しご苦労さんだったにゃ。 ゆっくりと休むといいにゃ。」

り：「はい。 それでは。」

そういうとリオンちゃんはジブンの部屋に戻ると洗濯物とお風呂に入る準備をしてすぐにできました。

り：「今日は雨の中で倉庫にいたりきたりと棚卸しで少し汚れたかしら？」

云いながら洗濯機に服を入れるとスイッチを入れて洗濯をはじめます。

そして、お風呂に入るために更衣室で着ていた、服と下着を脱いで駅舎のお風呂にはいります。

り：「あ〜〜、今日は慣れないことをやったからかしら？ なんか疲れちゃった。 でも、キャットフードを見た時の駅長さんの拒否の仕方って今までにないほど興奮してたみたいで可笑しかったわ。」

独り言を呟きながら、湯船に肩まで浸かっているりおんちゃん。ふと怪訝そうな顔つきになっています。

り：「アタシっていつまでこの駅に居れるのかしら？ 次の人事異動では無くて、あと1年は居れるらしいけど、その後はどうなるのかしら？ ここの勤務はそりゃあ時に死ぬほど退屈なときもあるにはあるけど、基本的にはアタシ向きだと思うし。 まあ、会社でつきものの上司と部下の関係とか同僚との関係ってのに悩まなくていいのがなによりいいわ。 駅長さんは猫だから変わってるのは仕方のないことですしね。」

おやおや、りおんちゃんはかなりこの田舎駅の勤務がお気に入りらしいですね。 携帯も無い、ネットも無い環境で今時の若い人には珍しいんじゃないでしょうか。

り：「そりゃあ、携帯とかネットとかで友達とやり取りしたいって思うこともあるし、男の子とデートしてみたいって思うこともあるけど・・・ 無くてもどうってことないってここに来て判ったし。 面倒な友達も多いからな～ アタシの周りは。。。」

り：「でも、たまには新曲とかも聞いてみたいけど、頼めば送ってもらえるのかしら？ 生活費から何から何まで本社にファックスで頼めばいいって駅長さんは云ってたけど。」

湯船で暖まってから洗い場で髪を洗い、身体を洗おうとしたりおんちゃん、ふと先日じゃん駅長を洗った温泉石鹸を手にしてみます。

り：「ここの温泉成分で作った自然石鹸だって云ってたけど使ってみようかな？」

温泉石鹸をタオルで泡立ててみると、今まで使っていた街から持ってきたボディシャンプーとは明らかに泡立ち方が違います。

り：「すご～～～い、こんな細かい泡になるんだ～ 駅長さんの身体を洗ったときに細かいな？とは思ってたんだけど、駅長さんの毛皮のせいじゃないのね。」

十分立った泡を身体に置き手で滑るように洗っていきます。 なんとなく皮膚の表面がヌルヌルとしていくようです。

り：「なんか皮膚の表面がヌルヌルして気持ちいい～～～」

そう言って全身を洗うと温泉で流してみると皮膚表面のヌルヌルはすぐに無くなって、代わりに皮膚の表面が少し光っているように見えます。

り：「なんかいつもと違うみたい？」

お風呂から上がって、私服に着替えると洗濯が終わった洗濯機から服を出して、脱水槽に放り込み脱水にセットしてまた洗濯機を動かしていると後ろからじゃん駅長が声をかけてきました。

に：「やっと、温泉石鹸を使ったんだにゃ。」

り：「えっ？分かるんですか？」

に：「皮膚の表面がそれだけ光ってればすぐに分かるにゃ。」

り：「皮膚の表面が？気のせいじゃないんですね？」

に：「ここの温泉成分に含まれているものの作用で皮膚表面の汚れだけはしっかり落ちて、皮膚に必要な成分を補充する働きがあるらしいにゃ。 それだけ、変わった山らしいにゃ、この辺は。」

り：「やっぱりそうなんですかね～～～ 洗っている最中からなんか変だな～とは思ってたんですけどね。」

に：「下の温泉宿も同じ成分らしいにゃ。 ただ、濃度はここの駅の1 / 10くらいらしいにゃ。」

り：「そんなに違うんですか？ それじゃ効き目も期待できないですよ？」

に：「それでも、1週間くらい毎日入れればほとんどの皮膚病が治るって話しだにゃ。」

り：「それじゃ、ここの駅舎のお風呂なら？」

に：「2日もあれば治らない皮膚病なんかないんにゃ。」

り：「ふ～ん、そんないい温泉で更に成分が入った石鹼なら悪いわけありませんね。」

に：「そういうことにゃ。 ただ、あんまり知られて人が多くても困るし、自然も壊されるから駅を作って人がこないようにしているらしいにゃ。それも列車がほとんど来ない駅をにゃ。」

り：「それで、なんですか？ここの駅の存在する理由は？」

に：「他にもあるらしいにゃ。 それ以上のことはジブンも知らニヤいにゃ。 りおんちゃんはその温泉で石鹼まで使って、それ以上綺麗になってどうするんにゃ？」

り：「えと・・・いまはわ・か・り・ま・せん！」

に：「まあ、いいにゃ。 それよりこの温泉のことは他の人には云わないようにするにゃ。 田舎電鉄でも田舎駅に関係する人しか知らニヤいにゃ。 メールも携帯も無いのはそれも理由にゃ。」

り：「は～い。 ところで、、、新譜のCDって頼めば送ってもらえるんでしょうか？ 駅長さん。」

に：「いつものようにファックスで頼めばいいにゃ。」

り：「は～い。 わかりました。 じゃ、洗濯物を干さなきゃ。」

脱水が終わった洗濯物を取り出して、部屋に運びます。

それからにゃん駅長といつものとおり、少し話しをして床についたのでした。

初めて聞かされた田舎駅の存在理由の一部、大変な効能の温泉。

これからもにゃん駅長とりおんちゃんの田舎駅での生活は続きそうです。